

テーマ2

『環境に配慮し、安全で簡便な
地域文化遺産保存管理』を
地域住民と展開するための
基礎研究と教育普及

テーマ2 「『環境に配慮し、安全で簡便な地域文化遺産保存管理』を地域住民と展開するための基礎研究と教育普及」

米村祥央

1. 地域文化遺産の保護に関する基礎研究と実践

山形県内には他県と同様に国や県、市町村の指定を受けていない未指定地域文化遺産が数多くある。本研究プロジェクト『テーマ1』では、これまで広く認知されていなかった未指定の地域文化遺産を多数見出すことができ、地域史等と合わせた考察から新たな価値づけも進んでいる。一方でこうした地域文化遺産の数は、市町村教育委員会、県内各種博物館や学術機関が維持管理可能な量を超えているのも現状である。そのため、今後は所有者をはじめとする地域住民の手で次世代に継承できる形が必要である。住民自身による継承は地域文化遺産の本来の形でもあるが、現実的にはいくつかの問題点もあり、それらは人材と方法論に集約できる。

寺社仏閣を管理する人々の多くは高齢者となり、当該地域も過疎化が進み若者の数が減っている。そのため人材が不足し、諸作業が物理的に困難となっている。また、信仰・行事を通じた諸技術の引き継ぎも途絶え始めており、結果的に継続的な文化遺産の管理も滞ってしまいつつある。

文化財保存分野で理想とされている方法は、文化遺産を構成する素材に対して適切な環境を整備し、管理することである。しかし、多くの場合設備投資・維持管理にコストを要し、研究対象としている地域文化遺産には現実的でない。

本プロジェクトでは、これらの問題を解決する糸口として『テーマ2』を設定した。

—テーマ2—

『環境に配慮し、安全で簡便な地域文化遺産保存管理を』地域住民と展開するための基礎研究と教育普及

予防的保存 (Preventive Conservation) の観点では、文化遺産の劣化速度を最小限に抑えるため、環境を整え日常的なケアを続けることが重要視されている。本プロジェクト研究テーマ2は、この予防的保存の観点に基づき、地域住民自身が文化財の保存活動を実行できるよう入手しやすい物品を用いる、簡便で安全な方法を検討している。特に寒冷地である山形県の実情を考慮した研究を進め、地域での活動に沿うものとなるよう実践的保護対策の実施を目指している。

また本テーマでは、研究対象地域が従来営んでいた一次産業で文化遺産に関わりのあるものを見出し、地域文化力向上のための活用の可能性についても検討している。これらは一方的な研究情報の提供ではなく、地域住民参加型の研究となることを目指しているため、地域の中にも活かした経験・データとして浸透し、永続的な地域文化遺産の保存活動が可能になると期待される。

今年度は、前年度までの調査を基に文化遺産を所有している施設を3つのレベルに分類した。レベル1は、高島町大聖寺の宝物館を代表とする所蔵品保管専用の施設を要するもの、レベル2は大江町巨海院のような檀家寺をはじめとする寺社仏閣、レベル3には住民住居から離れた地にある施設 (お堂等) を設定した。それぞれのレベルに特有な問題点を見出し、有効かつ実施可能な対策を検討するものとする。

2. 平成24年度の研究概要

(1) 保存環境調査に関する研究

高島町大聖寺 (亀岡文殊) では環境調査を実施し、外気の変動に対して宝物館、本坊と護摩堂の気温はやや穏やかに変化するものの大きな差はないことが明らかになった。相対湿度の変化も外気に比較して緩和されるが、その程度は建物によって異なっていた。また、捕虫トラップを使用した調査によって、侵入している文化財害虫やその経路が明らかとなった。

上記調査結果を基に、侵入口と認定した建物入口シャッターと扉下部に隙間テープを貼り、もう一つの重大な侵入経路であり昨年まで夏季に開放されていた展示台下の窓へ網戸を設置した。これらの対策によって、

害虫の侵入を制限することができた。さらに、内部で虫害が進行していると考えられた木彫像や版木などについて、二酸化炭素を用いた殺虫処置を実施した。これらの活動がきっかけとなり、宝物館内部・展示台などの清掃等人的ケアによる環境の改善も進んだ。

(2) 地域文化遺産保護活動の実践

地域に所在する書画作品のうち、絵馬は厳しい保存環境にあることが多く、風化、色材の剥落、虫損、小動物による損傷などが進んでいる。こうした損傷を応急処置によって抑えることや、保管場所を整えるだけでも作品の保管状況は格段に向上する。これまでに、西川町獅子が口諏訪神社や旧本道寺などで調査と並行して絵馬の応急処置を行った。

白鷹町塩田行屋における調査時に、建物内部の清掃活動と応急処置作業を集中的に実施した。長年の間溜まったほこりや、現在も活動する虫や小動物による汚損などを清掃し、内部の美化は劇的に進んだ。また、様々な要因で破損した仏像などを、後の本格的な修復を想定した簡易的な方法で応急処置した。清掃には地域行政機関、住民の方々も参加していただき、協働作業による地域住民保護活動の第一歩として意義のあるものとなった。

(3) 青苧と和紙からみた地域文化力の向上

大江町の特産である青苧は繊維の原料として栽培されていたが、和紙の原料としても用いられる。大江町の『青苧復活夢見隊』や隣接する西川町の特産である和紙の生産者に協力を仰ぎ、青苧和紙を通じた地域文化力向上の可能性を検討し、新たな展開を目指した活動を進めた。

(4) 教育普及活動

地域文化遺産の保護にとって大切なことは、専門家のみが保護・保存活動を実施するのではなく、直接的に地域文化遺産を担う地域住民が主体となった活動が永続的にされることである。そのためには、若年層から老年層までの地域文化財保護活動に関する教育普及活動を行う必要がある。そこで、テーマ1とテーマ2の研究によって得られた地域文化遺産保護の実践活動からの知見を、ワークショップ、勉強会、研究会、報告会、シンポジウム、展覧会などを通して地域住民と対話し、一緒に学びながら浸透を図ることで、次世代への地域文化遺産保護に対する教育普及を目指している。本年度は4月に高島町、8月に西川町、12月に大江町においてシンポジウムを開催した。

Ⅶ. 保存環境調査に関する研究

亀岡文殊における保存環境調査と簡易的生物被害対策

米村祥央

1. はじめに

大聖寺は“亀岡文殊”として知られ、丹後の“切戸の文殊”、大和の“安倍の文殊”とともに日本三文殊の一つとして県内外から参拝者が訪れる高島町を代表する名所である。既に本プロジェクト・テーマ1の研究において悉皆調査を実施し、本坊や宝物館、護摩堂内にこれまで未認知であった歴史資料等の存在が明らかになった。その一方で、虫害による食損や汚損の事例も多く確認され、被害現状と原因となる環境が大きな問題となった。

一昨年より温湿度を中心とした環境調査と生物被害調査を実施してきたが、平成24年度はモデルケースとして環境改善に向けた対策を施した。本報告では、具体的な実施事項とその効果について述べ、新たな課題についても挙げていきたい。

2. 方法

(1) データロガーによる温湿度調査

調査地の年間環境特性を知るために温湿度データロガーを用いて温湿度の変動を調べた。

使用機器：HIOKI(株)製温湿度データロガー6041

調査期間：2011年11月25日より

記録間隔：2011年11月25日～2012年5月25日（30分）

2012年5月25日～2013年3月31日（60分）

設置場所：宝物館、境内の屋外、大聖寺本坊、護摩堂内

(2) 対策

平成22年度の調査と今回の調査中に得られた結果、問題点をもとに、下記に示す対策を実施した。

- ・害虫侵入経路と判断した宝物館西側、東側の窓への防虫網（網戸）設置（亀岡文殊職員による）。
- ・宝物館入り口の扉、シャッターの隙間対策

使用テープ：内側の扉下部……ニトムズ社製「ドア下部シールテープ透明」

シャッター下部……ニトムズ社製「屋外用防水すきまテープ」

- ・宝物館、護摩堂周辺、宝物館窓に設置した網への防虫剤散布

使用薬剤：アース製薬株式会社製「虫こないアースあみ戸・窓ガラスに」（ピレスロイド系）

大日本防虫菊株式会社製「キンチョウ虫パウダー」（ピレスロイド系）

- ・二酸化炭素殺虫処理

生物被害が進行している宝物を対象に二酸化炭素殺虫処置を実施した。諸条件は以下である。

使用機器：日本液炭株式会社製二酸化炭素殺虫用ファスナーバック（ふくろうくん）

期間：8月28日～10月19日（3週間）



図7-1 防虫網を設置した宝物館窓



図7-2 シャッター下部への隙間テープ貼付け

二酸化炭素濃度：開始時約90%（株式会社ガステック製CO₂用検知管で測定）

処理宝物：本坊に保管されていた版木

宝物館北側に展示されていた獅子、仏像

- 宝物館で確認されたチャタテムシ対策

宝物館内各所に市販の除湿剤（水とり象さん）を設置した。

- 宝物館、護摩堂内の清掃

展示台など、調査時毎に清掃した。これにより、新たな生物被害の進行も早期に確認できた。



図7-3 ドア下部にシールテープ貼り付け



図7-4 宝物館展示室の清掃



図7-5 捕虫トラップ設置準備



図7-6 二酸化炭素殺虫処置

(3) 調査用捕虫トラップによる有害生物調査

実施した各対策の効果を検討するため、トラップを設置して対策前後の捕獲害虫数の推移を調査した。

使用トラップ：イカリ消毒社製昆虫調査用粘着捕獲器（粘着面8.5cm×15cm、高さ5.5cm）

設置期間：2012年5月25日～7月5日（第1回目）

2012年7月5日～8月28日（第2回目）

2012年8月28日～10月19日（第3回目）

2012年10月19日～12月13日（第4回目）

設置場所：宝物館11か所（図7-7参照）、護摩堂2か所

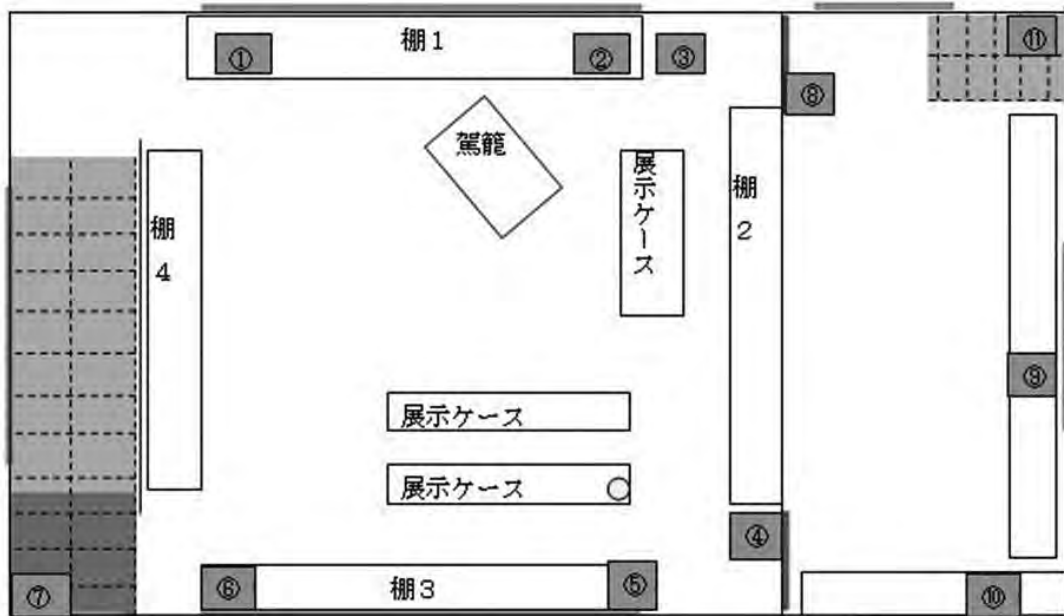


図7-7 宝物館内の捕虫トラップ設置箇所（丸数字部）

3. 結果と考察

(1) 亀岡文殊の温湿度環境

各測定点から得られたデータの月平均値をもとに作成したクリモグラフを図7-8に記した。温湿度のモニタリング調査では、事前の予測通り冬に湿度が高い山形県全域にみられる特徴が得られた。夏から秋にかけて乾性、湿性カビが発生しやすい環境であるといえる。調査した4か所共に同様の結果が得られた。

宝物館の年間の相対湿度は60%～90%の間で変動し、夏季以外は屋外や本坊、護摩堂と比較して最も低いことがわかった。敷地内の西側に建っているためか5月から9月にかけての気温も測定箇所の中で最も高い環境であった。

本坊は年間を通して最も湿度が高く、月平均の相対湿度が80%を超える月がほとんどである。本坊には仏像をはじめ書物や版木などが多く保管されており、カビが発生する危険性は高い。護摩堂は木造の新しい建物であり、賽銭を入れるための窓が常に開いている。宝物館と比較すると相対湿度は夏季に低く、冬季は高いことが特徴である。

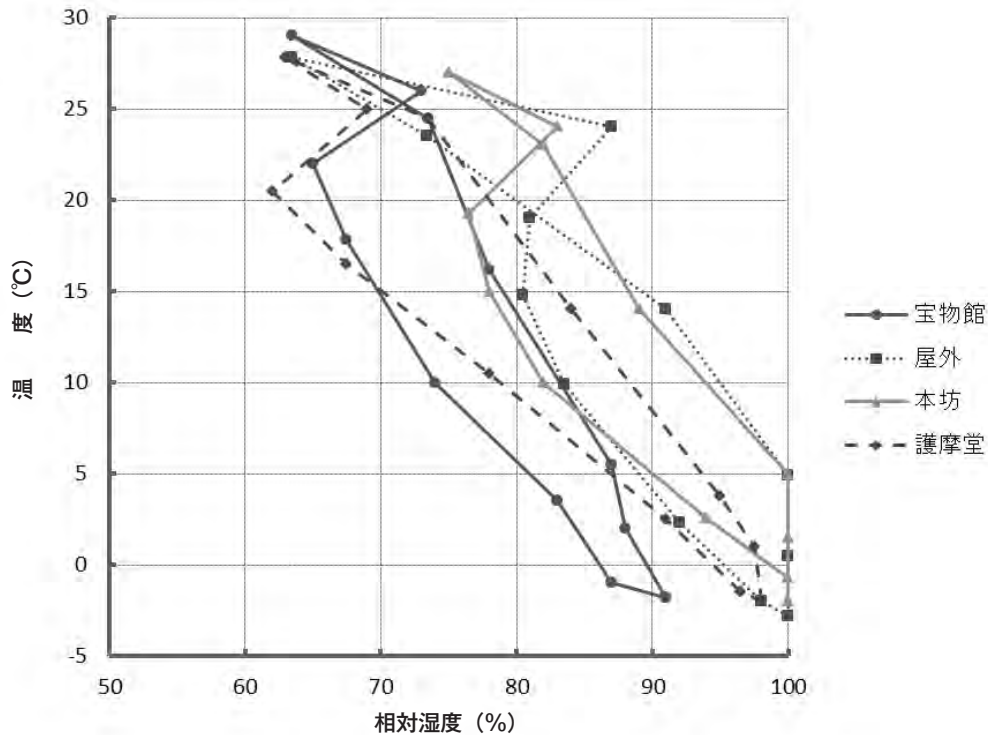


図7-8 亀岡文殊各調査地におけるクリモグラフ

(2) 対策とトラップ調査より

各トラップで捕獲した生物種を同定、カウントしてまとめた。ここでは表7-1、7-2に2012年5月25日から7月5日と、7月5日から8月28日に設置したトラップの結果について記した。宝物館西側の窓は、平成23年度までの調査で有害生物の侵入経路の一つと示されていたが、捕獲数は年間を通して少なかった。これは防虫網を設置した効果と考えられる。宝物館入り口には、大型歩行性昆虫の侵入防止を主な目的とし隙間テープを貼った。この対策前後で捕獲数の総数は対策後の方が増加したが、トビムシ等の小型の虫が増えたため、大型の虫は減少した。夏季の活動が活発になる時期に大型歩行性昆虫捕獲数が減少したため、侵入防御ができたようである。しかし、秋になると越冬のためか、侵入した虫を多く捕獲した。原因は、隙間テープで防ぎきれなかったわずかな隙間からの侵入、人間がドアを開け出入りした際の侵入、隙間テープの劣化によりできた新たな隙間からの侵入等が考えられる。隙間テープによる対策は効果があるが、テープの劣化等を考慮すると定期的な交換が必要である。

宝物館内に設置したトラップNo.3、4で散布前に捕獲されたムカデが、防虫剤散布後は一度も捕獲されなかった。No.3、No.4は部屋の隅に設置したトラップだが、ゲジやゴキブリが捕獲されたことから、大型昆虫の通り道となっていると思われる。侵入経路は北側の物品保管庫に通じる扉である可能性が高い。

No.2で捕獲したムシのほとんどはチャタテムシやアザミウマなど小型の虫であった。ただし、東側窓に設置したNo.5、No.6で第2回調査時にチャタテムシを大量に捕獲した。チャタテムシの数が多く、データの解析に影響が出るため、チャタテムシを除いて検討すると、各種対策の効果が明瞭になった。

チャタテムシなどの小型の虫を除いた全捕獲数をトラップ数で割った値をトラップ平均捕獲数として定義した。対策を施した宝物館展示室と対策していない倉庫でそれぞれ算出した平均捕獲量の推移を表7-3に示した。表7-3からも明らかのように、全ての調査時において、対策を施し展示室側の捕獲数が少なく、7/5～8/28の最夏季を除いて50%未満の捕獲数であった。これは防虫網等の設置による効果と考えられる。

表7-1 宝物館内に設置した各トラップで捕獲した生物（5月25日～7月5日）

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	合計 (匹)
アトホシゴミムシ										1	1
アリ				1							1
カ	1				1	2		3			7
ガ								1	1		2
ガガンボ						1		1			2
カマドウマ		1									1
クモ				3		5	3	1	1	3	16
ゲジ						2					2
スズメバチ						1				1	2
ゾウムシ										1	1
ダニ	1	2	3	1	1	1			1		10
タマバエ	4			1		12		5	1	2	25
ダンゴムシ										2	2
トカゲ						1					1
トビムシ						4					4
ヌカカ								1			1
ハエ	1	1	4	1	2	8		4	7	9	37
ハサミムシ						1				1	2
ハネカクシ						2		2			4
羽虫			1			4	1	1			7
ヒメカツオブシムシ(幼虫)				1			1	6			8
ヒメカツオブシムシ(成虫)											0
ヒメマルカツオブシムシ(幼虫)					1						1
ヒメマルカツオブシムシ(成虫)	1		1								2
チャタテムシ		1	2			10		2	2	3	20
チョウバエ								5	5	1	11
マイマイカブリ										1	1
ムカデ			2	1							3
ヤマトゴキブリ(幼虫)		1								3	4
ヤマトゴキブリ(成虫)	1				1		1			3	6
ユスリカ									1	4	5
ヨコバイ									2		2
不明	1					1	1	1	1	2	7
合計(匹)	10	6	13	9	6	55	7	33	22	37	198

表7-2 宝物館内に設置した各トラップで捕獲した生物（7月5日～8月28日）

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	護摩堂 No.1	護摩堂 No.2	合計 (匹)
アザミウマ	1	7	1		3	5		1		1	4	5	8	36
アトホシゴミムシ											1			1
アリ													1	1
カ											1			1
ガ	1							2		6	2	1	2	14
カツオブシムシ科				1										1
カマキリ									1					1
カマドウマ										1		1		2
カメムシ								1	1					2
クモ	1	3	3	3	3	6	11	5	2	3	22	8	3	73
コオロギ							1							1
シバンムシ科								1	2	1				4
ジンサンシバンムシ										1			2	3
スズメバチ										1			1	2
ダニ		7		2		3		1				1		14
タマバエ	1		1	1	3	5	19			3	12	17	5	67
ダンゴムシ							1						1	2
チャタテムシ	9	24	1	9	51	24	3	15	2	1	3	8		158
トビムシ		1			1	1	27				4	5	2	41
ヌカカ											1		1	2
ハエ			1								3	9	4	17
ハサミムシ											1			1
ハチ										1			1	2
羽虫				2		4	10	6	9	18	15	11		75
ヒメカツオブシムシ(幼虫)					10	1	1			1			2	15
ヒメカツオブシムシ(成虫)														0
ヒメカツオブシムシ(抜け殻)									1	1	2			4
ヒメマルカツオブシムシ(幼虫)					1			1	1			2	2	7
ヒメマルカツオブシムシ(成虫)		1							3		2			6
ヒメマルカツオブシムシ(抜け殻)						1		1			8	3	1	14
ホシチョウバエ		1			1						1		1	4
ムカデ											1			1
ヤマトゴキブリ(幼虫)								1						9
ヤマトゴキブリ(成虫)											8			0
不明	3	7	1	1	6	4	11	3	2	4	1	2	1	46
合計(匹)	16	51	8	19	79	54	84	38	27	40	92	78	41	627

表7-3 チャタテムシを除いた生物の各トラップにおける平均捕獲数

トラップ設置期間	宝物館平均(匹)	倉庫平均(匹)
2012/5/25～7/5	7.8	19.3
7/5～8/28	18.0	29.0
8/28～10/19	8.3	29.7
10/19～12/13	1.8	4.0

図7-9は宝物館と倉庫の入り口（各トラップNo.7とNo.11）における比較的大きい虫の捕獲数を時間軸（横軸）で示したトラップ回収日にプロットし、その変動を表したものである。隙間テープなどの対策を施していない倉庫側入り口では最夏季の7/5～8/28に捕獲数が大きく増加したのに対し、対策を施した宝物館入り口では減少した。これにより、宝物館展示室入口のシャッターに設置した隙間テープとドアに設置したシールテープの効果が得られたと判断できる。

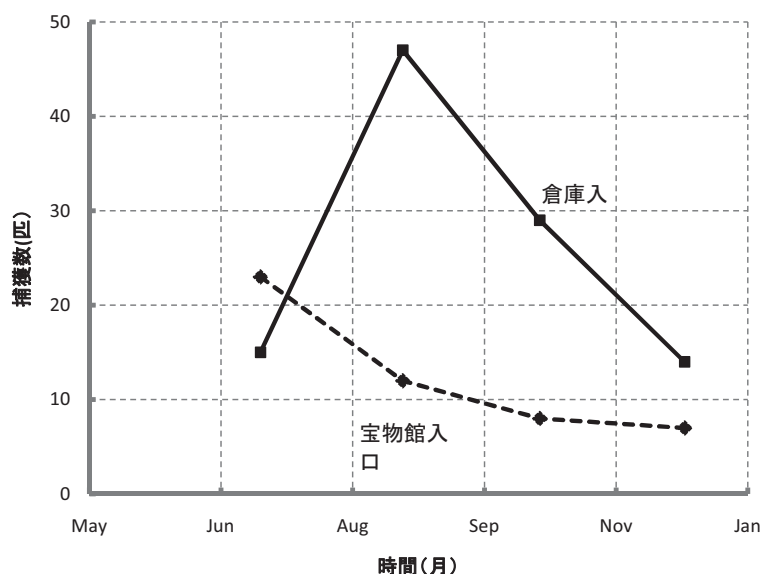


図7-9 宝物館と倉庫の入り口における比較的大きな虫の捕獲数推移

— チャタテムシの数に関する考察 —

宝物館に設置した各トラップのチャタテムシ捕獲数について、調査期間における累計を算出した。それぞれのトラップの捕獲累計を相対的に棒の長さで表し、数値と共に宝物館2階見取り図に記入したものが図7-10である。杉山の著書におけるチャタテムシの生態について下記2項目のような記述がある²⁾。

- ・高湿と暗所を好み、乾燥と空気の動きと光を嫌う
- ・菌類を栄養源とするので、カビの繁殖はチャタテムシの大発生を招く。

敷居で区切られた北側の倉庫と南側の展示室では、その環境が大きく異なっている。倉庫には東西北のかく壁に一般的な窓が設置され、日中は明るく湿度も低下する。一方展示室には展示台の下にある窓しかなく、照明を点灯しないと日中でも暗い。そのためか、北側の倉庫と比較して体感的にも湿度が高く感じられた。残念ながら、温湿度の違いを測定していないが、この環境の違いは上記のようなチャタテムシが好むか否かの環境の違いでもある。夏季の発生増加に関して原因は不明であるが、展示室がチャタテムシの好む環境になっていた可能性は高い。また、各種対策の効果によって捕食者である大型の虫の侵入がなくなったことも一因と考えている。

殺虫剤は散布した方がより防虫効果があるはずだが、明確な効果は今回の調査では不明である。使用した散布薬剤の効果は約30日であり、屋外に散布したため、風雨で効果が弱まった可能性がある。また、散布した場所が白くなり、大量に散布すると目立ってしまうというデメリットもあるため、入り口につりさげるタイプの防虫剤など使用殺虫剤の再検討も必要である。

二酸化炭素殺虫処理を終えたファスナーバック内部にはシミの死骸を多数確認した。処理した獅子像、仏像は宝物館の展示台に戻し、版木は再度の虫害を防ぐために布団圧縮袋に入れて密封し本坊に戻した。後に、護摩堂ではカツオブシムシやヒメカツオブシムシの死骸を多数西側の窓で確認した。その近くの仏像には虫が出入りしたと考えられる穴、食いカスがあった。新たな害虫被害が進行したと考えられる。他にも虫害が進行している資料等が潜在的に存在している可能性は高く、平成25年度以降も順次殺虫処置を施す必要がある。

対策を施した網戸、隙間テープ、ドア下部シールテープ、殺虫剤散布、それぞれの効果の優劣については、調査からは判断できないが、これらが総合的に作用して有害生物の減少に寄与したといえよう。網戸の目以上の大きさの昆虫は侵入できなくなったことは確実であり、大型のハエやカ、カツオブシムシの成虫なども網戸から侵入することは不可能と思われる。

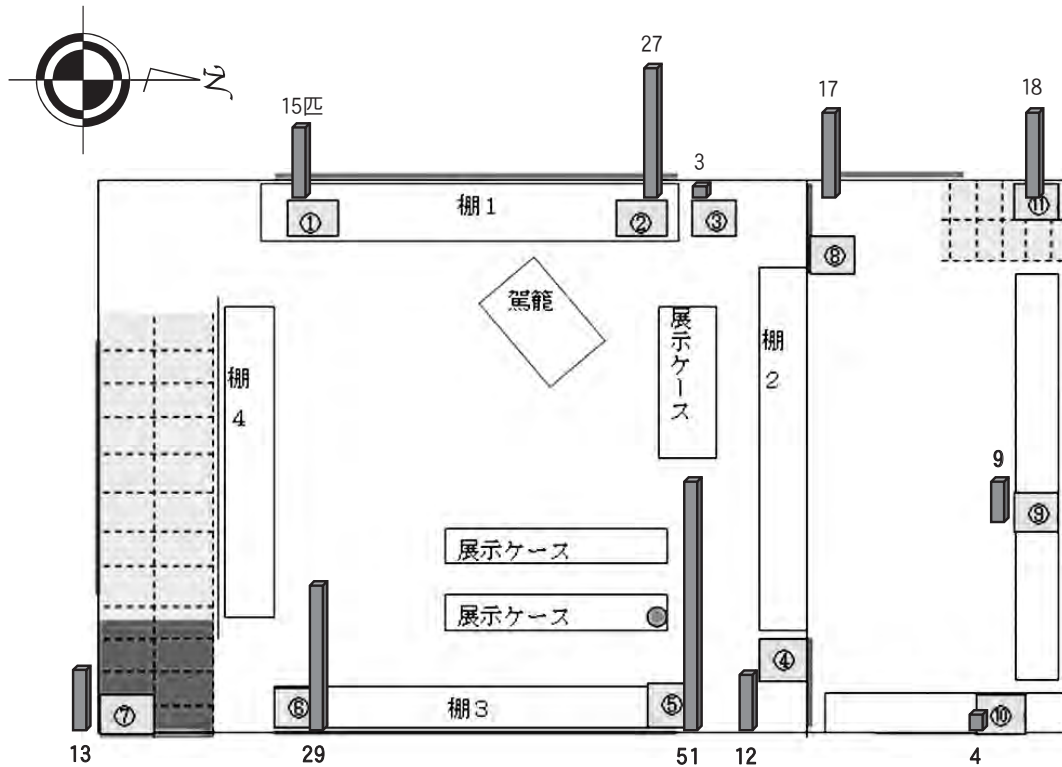


図7-10 各トラップで捕獲したチャタテムシの累計

4. まとめと今後の展望

対策と調査を同時に進めているため、効果を明確に提示することは難しいが、環境改善の成果は得られたと考えている。来年度も対策を続けながら経過を観察していきたい。また、今年度二酸化炭素で殺虫処置したものの以外にも虫害が懸念される資料等があるため、来年度効果的な時期に再度実施する予定である。重要な点は、本プロジェクト終了後の継続的なIPM活動である。本研究では、プロジェクト終了後に管理者らが作業することを考慮して、可能な限り一般に入手しやすく、安全な資材を用いて対策を施した。今後の在り方について管理者側との協議、ボランティアや小中学校の教育など外部の人員の協力体制の可能性等も検討していきたい。

以上、テーマ2概要で記したレベル1の施設として設定した亀岡文殊における活動を中心に述べたが、本プロジェクトでは他の研究対象地での取り組みが来年度以降必要である。大江町の寺院では供物に虫が発生し腐敗が始まるなどの問題を確認している。また、同町黒森大日堂では、ねずみ等の小動物によるものと予想される被害も確認し、外部からの有害生物の侵入が容易な対策が難しいレベル3の条件である。亀岡文殊で得られた実績を活用して、新たな環境改善を試みたい。

参考文献

- 1) 『平成23年度文化財保存修復研究センター研究成果報告書』東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター、2012年
- 2) 杉山真紀子『博物館の害虫防除ハンドブック』雄山閣、2001年
- 3) 岡田彩奈「山形県高島町大聖寺（亀岡文殊）のIPMについて～トラップによる生物被害調査及び簡易的な防虫対策の結果～」東北芸術工科大学美術史・文化財保存修復学科卒業論文、2013年

塩田行屋での総合的な保護活動を通じて

岡田 靖 宮本晶朗

1. はじめに

地域文化は人々のあらゆる営みによって育まれるが、何時の時代、どの地域であっても、人々の精神的な依り所となる宗教的活動は地域文化の中核を担い、その信仰の対象として仏像や神像、獅子頭、鏡、絵馬、書画などの多種多様な文化的所産が生産されてきた。それらの文化遺産が安置される宗教施設には、住職や神主などが在住している場合が一般的であるが、現在、地方の宗教施設では他の施設との兼務や無住の状態になるケースが増えている。その原因として考えられるのは、地域社会の過疎化と宗教的活動の衰退である。

本センターが所在する山形県においても、その傾向は顕著に見られる。周知の通り、日本の仏教は江戸時代の幕府による寺院統制以降、地域住民を檀家として組織管理したり、またそれら檀家の葬式を催したりといった役割を担ってきた。そのため、地域には必ず寺院もしくは神社が存在し、地域コミュニティーの中心的な存在として機能してきた。しかし、地域における地場産業の衰退や都市部への人口集中化などの要因によって、山間部を中心とした地域の人口が減少し、さらに少子高齢化が進んだことで、地域の過疎化が深刻になっている。そのため、過疎化が進んだ地域の寺院では、檀家としての地域住民の経済的な支援によって支えられている檀那寺の特性から、地域住民の減少に伴って運営維持が困難な状況に陥り、その結果、他寺院との兼務や廃寺となる事態が避けられない状況となっている。また、山間部などにはもともと在住管理者がいない小規模な堂宇の社寺が点在しており、地域の住民らの共同管理によって信仰されてきた宗教施設が多くある。そのような社寺における過疎化や宗教的活動の衰退による影響は深刻で、現状において管理の手が及ばずに、堂内に安置されている貴重な文化遺産が人知れず甚大な損傷をうけている事例も多くみられる。

そのような地域における文化遺産を取り巻く現状を踏まえ、本研究では如何に地域において文化遺産を保護していくかを大きな課題として取り組んでいる。そのために、テーマ1において地域に存在する文化遺産の調査を実施し、それらを歴史や文化的背景に即した多角的な研究考察を通じて地域文化遺産の意義の再発見を行うことで、地域文化遺産としての価値の底上げを図ってきた。テーマ1における研究活動の成果は、地域文化遺産を保護するための大前提となる文化遺産への関心の向上へと繋がると考え、それが保護活動の第一歩となると位置付けている。そして、文化遺産の意義の再認識や関心の向上を促した後、地域文化遺産保護の直接的な担い手である地域の住民や行政機関を交え、先に挙げた地域に横たわる社会的な諸問題の課題を克服しうる実践的な保護活動の展開をテーマ2の目的とした。

2. 地域文化遺産保護の問題点と保存管理の現状

(1) 地域文化遺産保護の問題点

文化財を残していくための手段は修復活動において語られることが多いが、保存環境を整備して文化財の損傷をおさえるプレベンティブコンサーベーション（予防的保存）の理念も現在提唱されつつある考え方ではある。しかし、それらは博物館や美術館といった環境整備が可能な施設において実践される場合が多く、地域文化遺産への保存対策として実践された例は少ない。また文化財の保護活動も、指定された文化財が対象となることが一般的で、日本国内の文化財の総数から見れば、その他の膨大な数にのぼる未指定の文化財にその保護の目が行き届いていないのが現状である。未指定文化財は、指定を受けていないものは文化財ではない、といった間違った認識を受ける日本の文化財制度が生み出した弊害を被っている存在でもある。しかし、未指定文化財もまた紛れもない文化財であり、将来的に文化財の指定を受けていく予備軍であるとともに、地域の歴史・文化を伝える重要な遺産であることはいままでもない。そのため、現在の日本の文化財保護行政制度において保護の対象となっていない未指定の文化財に対しても、それらを健全な状態で保存維持していく必要があり、文化財を保護していく役割を担う保存修復関係者は、指定を受けた文化財とともにその膨大な数の未指定文化財の保護に努める必要があると考える。そのためには文化財保護関係者らが意識的にその保護活動に介入していくための努力が必要であり、また膨大な数の未指定文化財を保護していくためには、所有者や管理者の努力も不可欠である。まずは、文化財の保存に関わる我々が、未指定文化財の保存に関する専門的な保護活動を率先しておこなうことが肝要であると思われるが、それらの活動を、文化財を管理する地域の方々と一緒に取り組んだり、現在の保護制度の問題点に留意しながら保存管理の体制

を構築したりしていくことも重要となるであろう。その活動なくしては、地域文化の根底を支える未指定の文化財を保護し、地域文化力を下支えする文化遺産を永続的に保存継承していくことは不可能であると考える。

(2) 地域文化遺産の地域における保存管理の現状

本研究では、テーマ2概要で述べたとおり、対象地域における文化遺産のおかれている保存環境状態を3つのレベルに分類し、それぞれの状況に適した保護対策を実践している。3つにレベル分けした中でも、最も過酷な状況にあると位置付けたレベル3の状況は、文化遺産の保存管理における深刻な問題を孕んでいる。それらの問題は、地域の過疎化などの要因によって廃寺となったり、または地域で共同管理していた堂宇が管理者らの高齢化や管理者が不在となったりする要因によって、その管理が行き届かなくなったことよって発生する問題であり、その原因は多分に地域の社会的な問題に起因している。

管理が行き届かなくなると、堂宇の扉は年中閉められたままとなり、それによって森林に囲まれた山間部の堂の内部は必然的に高湿度環境となる。高湿度と適度な温度の条件下では、文化遺産に使用されている木材や紙、膠、糊などの成分を栄養分としてカビや虫が繁殖しやすくなり、それらが文化遺産に多大な損害を与える(図8-1)。また高湿度環境は、仏像や絵馬などに固着剤や接着剤として使用されている膠や糊などの劣化を促進させ、彩色層の剥落や部材の脱落を招くこととなる(図8-2, 3, 4, 5)。さらに、人の出入りが少ないお堂は、鼠やハクビシンなどの小動物の格好の住処となり、文化遺産を直接的に齧って損傷させたり、動物が排した糞に虫が発生して二次被害を引き起こしたりといった問題を生じさせている。所によっては仏像などの信仰対象の前に供物が捧げられている場合も見られるが(図8-6)、人の出入りが少なかつたり仏像の保護に対する認識がなかつたりすると、それらの供物が餌となって虫が繁殖することも問題となる。このような状況は、人の出入りが少なくなった山間部の社寺で共通してみられる状況である。

本研究では、調査活動を通じてそのような地域文化遺産の管理現場を目にしたことを発端とし、地域文化遺産を保護するための活動を開始した。その保護活動は、まずは調査時に撮影や調査のために文化遺産を移動する際に、安置場所の清掃や文化遺産そのものの簡易清掃を行う活動から始めた。また、文化遺産の適切な保存に必要な最低限の形体維持のために、部材の脱落や絵画面の支持体の剥がれなどに対する応急的な修復処置を実践した。

それらの保護活動は対象地域の各所で展開しているが、本報告書では、テーマ1「当該地域における近世近代の仏像の造像活動の展開」の中で報告した新海宗慶および竹太郎らの造像による諸尊などが多数安置される白鷹町塩田行屋において実践した総合的な保護活動の成果について報告したい¹⁾。



図8-1 高湿度環境によって壁に発生した黴



図8-2 虫によって食害された絵馬



図8-3 虫の食害により仏像周辺に散らばる木屑



図8-4 膠が劣化し剥ぎ目から遊離した仏像の部材



図8-5 木屑が散乱し、仏像の部材が脱落している



図8-6 仏像の周辺に捧げられた供物

3. 地域文化遺産保護の実践（塩田行屋での総合的な保護活動の実践報告）

(1) 白鷹町塩田行屋の文化遺産と管理状況

塩田行屋は、大日坊（現在の山形県鶴岡市）で修業した湯殿山修験者の明寿海上人によって、山形県西置賜郡十王村塩田（現在の白鷹町十王塩田）に明治10年頃に開創された。明寿海上人以後、修験者四代にわたって周辺地域の信者らを中心に信仰されてきた塩田行屋であるが、四代目智妙海が同行屋を去った昭和5年頃を最後に、その宗教的な活動を停止している。現在遺されている建造物は本堂と土蔵（大師堂）のみになっているが、以前にはこの他に大日堂と修験者の庫裏（住居）があった。

現存する堂内には、土蔵（大師堂）内に白鷹町指定文化財となっている「木造如来形立像」（鎌倉時代）、「木造役行者倚像」（鎌倉時代）、「銅造蔵王権現懸仏」（江戸時代前期）の3点が安置され、他にも新海宗慶（宗松）が明治32年に制作した「厨子入り四国八十八箇所本尊仏像」、「厨子入り明寿海上人像」などの文化遺産が安置されている。一方の本堂内には、須弥壇上に湯殿山信仰に関係する「御沢仏」とよばれる仏像群25体と「木造風神・雷神像」、「木造如意輪観音菩薩坐像」、「木造地藏菩薩立像」が安置され、いずれも新海宗慶と息子である竹太郎が明治9～12年頃に制作したことが本センターの調査によって明らかとなった。本堂内には他にも「厨子入り大日如来坐像」、「木造弘法大師坐像」、「木造興教大師坐像」などが安置されている。これらの塩田行屋に安置されている文化遺産は、「厨子入り四国八十八箇所本尊仏像」の88体を1点ずつで数えると100点を超える数にのぼる。指定文化財はもとより、その他の多くを新海宗慶、竹太郎親子が手掛けた仏像が占める塩田行屋の諸仏は、極めて貴重な文化遺産であるといえる。

そのような貴重な文化遺産を多く有する塩田行屋の管理は、現在同地区の地域住民6家によって行われている。それら6家は塩田行屋と無関係ではなく、塩田行屋初代明寿海との親交が深く、開創以来代々に渡ってその管理に携わってきた。しかし、現在同行屋の管理を中心的に担っている方々はいずれも高齢である。行屋は、管理者の住居から続く舗装されていない一人が通れるほどの狭く急な坂道を50メートル程登った山林に囲まれた立地にあり、その環境が日常的な管理を妨げる要因となっている。

そのような管理体制の下、行屋としての宗教活動が停止した今でも、塩田行屋では年に2回の清掃活動を行っている。夏季には管理者6家の男性陣が集まり、堂宇の補修や周辺の草刈り、堂内の虫の燻蒸などの環境整備を行っている。この時には、堂内の清掃は簡単な掃き掃除を行うにとどまっているようである。また、雪が降る前の12月初旬には、6家の女性陣が掃除道具を持ち寄って堂内の清掃を行っている。しかし、堂内の須弥壇上は、宗教的空間への遠慮から清掃を行ってはいないとのことであった。

このように、塩田行屋は管理者6家の自助努力によって最低限の維持管理がはかられている。しかし、主要な管理者が高齢であることや行屋の立地的な環境からその維持管理は容易ではなく、年2回の清掃活動が唯一の文化遺産保護の活動であった。

(2) 塩田行屋の保存環境

そのような管理の実情により、宗教機能を停止した塩田行屋では堂宇の扉が開放されることが少なく、年間を通じて扉が閉まっていることが多い状態となっている。扉が開くことが少ないということは、当然堂内に人が出入りすることも少ないということである。それらの状況は、管理者らの塩田行屋への関心を低下させる要因ともなっている。また、堂宇の扉の閉口が続くことで建物内の換気が滞ることとなり、その結果、木々に囲まれ敷地内に池が存在する塩田行屋のような立地では、堂内が慢性的な高湿度の状況におかれることになる（図8-7, 8）。そうした、湿度が高く人気のない状況におかれた堂宇では、堂内に安置されている文化遺産にとって多くの問題を引き起こすこととなる（図8-9）。

まず、高湿度環境下では、カビや虫などにとって繁殖しやすい条件が整う。そのため、塩田行屋の堂内にはカマドウマが群集し、壁や奉納品である垂れ幕に黒いカマドウマの糞の被害が生じていた（図8-10）。また、一部の木製仏像には虫の食害を受けたものもあり、像の周辺に食害による木粉や虫糞が散らばっている状況であった（図8-3）。この虫害は、像の形状を損なう深刻な被害であることは言うまでもない。

また、人気のないことによって鼠やハクビシンなどの小動物がすみつくようになり、鼠が巣作りのために運び込んだと思われる木片や藁などが、天井裏や須弥壇上に安置された仏像の間に散乱している状況であった。被害はそれらの堆積にとどまらず、鼠が排出した糞が堂内に散乱している状態であった（図8-11, 12, 13, 14, 15）。鼠糞は虫の発生を促す原因ともなるため、より事態は深刻となる。

さらに、塩田行屋本堂の須弥壇上に安置されている「御沢仏」の仏像群には、膠で接着されていた腕材や台座の部材などの各部材が脱落している像が多くみられ、脱落した像の部材が須弥壇上の埃や鼠糞などの堆

積物に混在している状況であった（図8-13）。その原因は、制作から100年余りを得たことによる膠の自然劣化とともに、本堂内の高湿度環境が膠の劣化を促進させたことによるものと推測できる。また、像の表面には膠を膠着材とした泥下地に同じく膠に顔料を練り合わせた彩色が施されているため、同様の理由によって彩色層の剥離、剥落が生じている状態であった。

このように、管理者らによって毎年2回の清掃が行われている同行屋であっても、須弥壇などの宗教空間に生じている被害は深刻なものがあることが確認された。管理者らが、宗教的な遠慮から須弥壇上の清掃をおこなっていないことは先に述べたとおりであるが、この状況は今後の文化財の保存のために決して好ましい状況ではなく、保存環境の改善と仏像の修復処置が必要であると思われた。



図8-7 塩田行屋の堂宇との周辺環境



図8-8 本堂の脇にある池



図8-9 活動前の本堂内部



図8-10 土蔵に繁殖するカマドウマとその糞害



図8-11 本堂内の仏像が倒れ、台座の崩壊も見られる



図8-12 本堂須弥壇上に散乱する鼠糞や木片などの塵



図8-13 仏像から脱落した部材が塵と混在している



図8-14 小動物の住処となっていた本堂の護摩壇内部



図8-15 本堂天井裏に堆積している小動物の糞や木片や糞などの塵

(3) 塩田行屋における文化遺産保護活動の実践

塩田行屋の土蔵と本堂の保存環境は、堂内に安置されている貴重な文化遺産の保存維持に対して好ましくない状況であることが確認された。特に本堂の須弥壇上に散乱する鼠糞は、礼拝対象である仏像の尊厳を損なう要因となるだけでなく、虫の発生を誘発する原因となる。また、安置されている仏像には腕材や持物などの部材が脱落していることが確認され、同様に仏像の尊容を著しく損なっている状態であった。

そこで本センターでは、後述する白鷹町文化交流センターでの展覧会のための塩田行屋の文化遺産悉皆調査に際し、室内や壇上の清掃活動や脱落した部材の応急的修復処置を実践することとした。

第一次保護活動

実践日：平成23年10月21日・22日・24日

実践者：本センター研究員：岡田靖・長坂一郎

本学学生：足立収一・石井紀子・斎藤友佳理・黒澤匠

本学卒業生：宮本晶朗（白鷹町文化交流センター学芸員）

A. 清掃活動

塩田行屋本堂には、「御沢仏」を中心とした30体近くの仏像が三段の階段状の須弥壇に安置されているが、像の上や像と像の間の隙間に、扉や建物の隙間から吹き込んだ土埃が堆積し、鼠が巣作りのために引き込んだ木片や糞などが散乱している状況であった。また、膠の劣化により脱落した各像の部材がそれらの堆積物と混じり合っている状態であった。

第一次保護活動では、文化遺産調査および撮影のために仏像の移動をおこなった際に、それらの堆積物の清掃を行った。その際、各像から脱落した部材を他の堆積物と混在している状態の中からより分ける作業をおこなったが、その作業は専門家であれば仏像の部材を見分けることが可能であるものの、他の木片ごみとの判別は容易ではない。そのため、堆積物の中を慎重に検査し、仏像の部材をとりわけ作業をおこなったうえで、箒や掃除機を用いて須弥壇上の清掃を実践した（図8-16, 19）。

また、各像の上面を中心に埃汚れが著しく堆積していたため、柔らかい刷毛を用いて除去した。その際、多くの仏像の表面彩色に剥離が生じていたため、それらが剥落しないように留意しながら埃汚れの除去作業をおこなった。さらに、数体の像の凹部や箱状の框座の内側に泥蜂が巣を作っていることが確認されたため、それらを砕き割って除去した。他にも虫糞や鼠糞が像に付着している状態が見られたため、その状態によって使用する刷毛の堅さを使い分け、仏像の損傷を拡大させないように慎重に作業をおこなった。

これらの措置は、像の状態を把握した上で実践しないと損傷を拡大させる危険性が高いため、専門的な知識と経験を要する作業であるといえる。しかし、清掃の際の留意点さえおさえれば、特別難しい作業ではない。また、清掃によって得られる効果は、文化財の保存管理において極めて有益であるといえる（図8-17, 18, 20, 21）。そのため、清掃の際の留意点を記したマニュアルを作成し、管理者らと共有することによって、今後の保存管理に関する対策を図っていきたいと考えている。



図8-16 須弥壇上の清掃



図8-17 須弥壇上の活動前の様子



図8-18 須弥壇上の清掃活動後



図8-19 須弥壇上の清掃



図8-20 須弥壇上の活動前の様子



図8-21 須弥壇上の清掃活動後

B. 応急的修復処置

本堂に安置された仏像の多くは、接着剤である膠の劣化により、多くの部材が脱落している状態であった（図8-22, 23, 24）。部材の脱落は、仏像の宗教的意義を大きく損なう要因となるだけでなく、その芸術的、資料的意義においても極めて深刻な損傷であるといえる。そのため、調査現場で実践可能な限りの脱落部材に対する応急的な修復処置を実践することとした。今回行った応急的修復処置は、脱落していた部材の再接着と剥離が著しい表面塗膜の再接着である。

今回の応急的修復処置では、対象となる仏像が将来的には本格的な修復処置をおこなう必要がある状態であったため、再修復が可能のように再除去ができる接着剤を用いて処置を行うこととした。

接着に使用した材料は、アクリルエマルション樹脂プライマルAC-2235（ローム・アンド・ハース・ジャパン社製）を使用し、それに粘性調整剤プライマルRM-2020MPR（前掲同社製）を少量加えて適度な粘度に調整し、それを脱落部材の接着面に点状に付けて接着をおこなった（図8-25, 26）。また損傷部材の状況に応じて、アクリル樹脂パラロイドB72チューブタイプを使用したり、状況に応じて瞬間接着剤（シアノアク

リレート系接着剤) やエポキシ樹脂 (1分硬化タイプ) を点付けで併用したりして接着をおこなった。表面塗膜の著しい剥離箇所に関しては、脱落部材と同様のアクリルエマルジョン樹脂を剥離界面に塗布し、塗膜を圧着して接着をおこなった。

今回の応急的修復処置に使用した主な材料であるアクリル樹脂系接着剤は、アセトンなどの有機溶剤で比較的容易に除去することができるとともに、硬化後は湿度に耐久力を持つ特性があるため、今回の条件に適した材料であるといえる。

他にも足柄を損傷して自立が出来ない像や壇上から落下して台座と像が分離していたものがあった。そのため、柄が亡失しているものは、形状に合った柄を新調して本来設置されていた状況に戻したり (図8-27)、調査結果を踏まえて台座と像の組み合わせを特定したうえで元の組み合わせに戻したりといった措置も実践し、須弥壇上および堂内全般の整備をおこなった。

これらの応急的修復処置の実践によって、脱落部材の紛失を防ぐとともに、一体の像としての形体の回復を行うことができた。仏像文化遺産の形体の維持は、当該作品の地域文化遺産価値を維持するために最低限必要な処置であり、今後の保存や将来的な本格修復に対しても有効であると思われる。



図8-22 割損した仏像



図8-23 脱落した仏像の部材



図8-24 脱落した台座の隅足



図8-25 脱落した部材の接着処置



図8-26 崩壊した台座の組み立て



図8-27 欠失した仏像の足柄の新補

第二次保護活動

第一次保護活動の実践によって、保存環境と仏像の形体維持に関する改善を図ることができた。しかし、第一次保護活動の半年後に再び塩田行屋を訪れると、清掃したはずの本堂の須弥壇上に再び藁や木片などの塵が散乱していた。その原因は本堂の屋根裏に小動物が持ち込んだ木屑や糞が膨大な量堆積し、それが天井板の隙間から落下していることにあった。そのため、後述する第18回白鷹紅花まつりに際した塩田行屋特別拝観に向けた準備を含め、本堂天井裏を中心とした大規模な清掃活動を実践することとした。

実践日 平成24年7月7日・8日

実践者 本センター研究員：岡田靖・長坂一郎・大山龍頭・大場詩野子・長田城治

本学学生：斎藤友佳理・遠藤葉里寿・中村浄栄・藤澤明穂・橋本彩

本学卒業生：宮本品朗(白鷹町文化交流センター学芸員)・足立収一・永井泊・楠千栄美(本学副手)

塩田行屋管理者：7名

第二次保護活動では、第一次保護活動で確認された本堂須弥壇上に堆積していた塵の出所である天井裏に堆積している小動物の糞や木片の清掃を中心に、土蔵や本堂の内部および堂宇の周辺も含めた大規模な清掃活動を実践した。

清掃作業は、まず本堂の須弥壇や護摩壇などに安置されている仏像や仏具類を全て移動して堂内を空にし、堂内の床にブルーシートを敷いたうえで、天井裏に堆積していた膨大な量の塵や小動物の糞を払い落して、そのすべてを除去した(図8-28)。また、堂内に巣くっていた泥蜂の巣を砕いて除去した(図8-29)。移動した

仏像類のうちの損傷がみられるものに対しては、第一次保護活動と同様の方法で応急的修復処置も実践した。

土蔵に関しては、埃の被害は本堂に比べて少ないもの、その壁にはカマドウマが群集し、その糞が壁に黒い汚れを生じさせていた。そのため、市販の燻煙型の殺中剤を使用してカマドウマの駆除を行った(図8-32)。その後、壁に染みついた糞害による汚れを雑巾やたわしで洗い落とし、さらに壁にエタノールを噴霧してカビの対策も行った(図8-33)。

これらの活動は、文化遺産の応急的修復処置はもとより、その移動や扱いに対しても専門的な知識を必要とするため、本センターの研究員や本学学生、または卒業生らが中心となって作業を行った。この卒業生を交えた活動体制は、地域文化遺産保護の永続的な実践を目的に本研究において設立を模索している「芸工大地域文化遺産保存修復ネットワーク」によるものであり、本活動が初の実践となった。

本センターで清掃活動等を行っている間、塩田行屋の管理者らが、堂宇周辺の草刈りを行ったり、屋根に積もった落ち葉などの清掃を行ったり(図8-34)、または未舗装の急坂の土道である現在の参道に木を打ち込んで階段を設置したり(図8-35)といった作業を、自発的に実践していただいた。これらの自発的な活動がみられたことは、今回の保護活動において最も特筆すべき成果であったといえる。また、高齢者中心であった管理者らの中に、その息子である若い方々の参加があった。2回に渡る保護活動の実践によって、地域文化遺産の保護意識を次世代に繋げることができたことは嬉しい成果である(図8-36)。



図8-28 天井裏の清掃



図8-29 泥蜂の巣の除去



図8-30 小動物が持ち込んだ藁や木屑の除去



図8-31 清掃後の本堂内部



図8-32 土蔵でのカマドウマの駆除



図8-33 土蔵での清掃活動



図8-34 管理者らによる土蔵の屋根の清掃



図8-35 管理者らによる参道の整備



図8-36 活動後の記念撮影

(4) 保護活動の一環としての文化遺産意義の普及的活動

今回の清掃活動や応急的修復処置の実践によって塩田行屋の文化遺産の保存環境と個々の仏像の形体が改善され、また、管理者との連携体制での実践によって文化遺産保護意識の共有を図る成果を得ることができた。しかし、今回のような活動が一過性の活動であっては意味をなさず、如何に保護活動を継続して行っていくかが地域文化遺産保護にとって重要となる。

永続的な保護活動のためには、管理者らが地域文化遺産やその保護に関心を持つ必要があることは言うまでもないが、地域における重要な文化遺産として、地域全般の住民や他の地域の方々の関心を得ることも重

要なことであると考えている。そのためには、宗教的関心が薄れつつある現代において、元来宗教的な目的で造像された仏像であっても、宗教的信仰に代わる関心によって文化遺産をとらえていく視点も必要となる。特に宗教活動を行っていない塩田行屋の現状を鑑みて対策を考察した際、宗教的意義とは異なる視点での地域における文化遺産の活用とその意義の普及を目的とした活動を行う必要があると考えた。

①町内の文化施設（白鷹町文化交流センターあゆーむ）での展覧会の開催

白鷹町にある白鷹町文化交流センターあゆーむは、町の文化的な活動の拠点として設立された複合文化施設で、地元出身の画家である梅津五郎の作品の紹介や各種の企画展示を行っている。平成23年度の企画展として、学芸員である筆者（宮本）によって白鷹町の仏像に関する展覧会が構想され、第1回目の企画として塩田行屋の諸尊を対象とした企画展が催されることとなった。本センターの塩田行屋に関する研究は、その白鷹町文化交流センターの塩田行屋の展覧会に際し、仏像の調査、梱包、運搬補助、展示補助などの業務を受託研究として受けて実践したことに端を発しており、調査によって明らかとなった成果については、既に述べたとおりである。

白鷹町文化交流センターで実践された塩田行屋に関する展覧会は、塩田行屋所蔵の町指定文化財の3体の仏像を中心とした第1回目の展示を平成23年秋に、本堂の御沢仏群像を中心とした第2回の展示を平成25年春にと、今までに2回開催された。また、展覧会に関連して、本センター長の長坂一郎と白鷹町文化交流センター学芸員の筆者（宮本）による講演会を開催し、塩田行屋の諸尊に関する研究成果の発表を行った（図8-39）。

2回にわたる展覧会と講演会には白鷹町町内外の多くの観覧者が来場し、塩田行屋の文化遺産に対する興味と理解を得ることができた。また、展覧会中に実践したアンケートでは、応急処置を施したとはいえ表面塗膜の剥離や剥落が著しい塩田行屋の諸尊を観覧した方々から、その修復や保存に対する必要性を訴える意見が多く寄せられた。これらの展覧会や講演会の開催は、白鷹町文化交流センターの主催と本センターの協力の連携によるものであったが、地域の文化遺産への理解向上といった目的を一にするこれらの取り組みは、地域文化遺産保護を展開するための重要な活動となった。

A. 塩田行屋の仏たち — 白鷹町の仏像展① 中世から明治の仏像— 展（図8-37, 38, 42）

展覧会期間：平成23年11月15日～12月11日

出展品：「木造如来形立像」「木造役行者倚像」「銅造蔵王権現懸仏」（以上3点は白鷹町指定文化財）、「木造如意輪観音菩薩坐像」「木造地藏菩薩坐像」「御沢仏群像7体」「新四国八十八箇所本尊仏像」「版木」など

B. 「異形の神仏 — 白鷹町の仏像展② 塩田行屋の「御沢仏」展（図8-40, 41, 42）

展覧会期間：平成25年3月26日～4月14日

出展品：「御沢仏群像25体」「木造風神立像」「木造雷神立像」「木造如意輪観音菩薩坐像」など



図8-37 「塩田行屋の仏たち」展の展示風景



図8-38 「塩田行屋の仏たち」展の展示風景



図8-39 「塩田行屋の仏たち」展での講演会



図8-40 「異形の神仏」展の展示風景



図8-41 「異形の神仏」展の展示風景



図8-42 「塩田行屋の仏たち」展(左)と「異形の神仏」展(右)のチラシ

②地域主催のまつり（白鷹紅花まつり）での特別拝観の企画

白鷹町文化交流センターでの展覧会の開催によって、観覧した方々への塩田行屋の文化遺産そのものに対する理解の向上を得ることができたが、塩田行屋での保存環境の実態を知ってもらう機会も必要だと考えた。また御沢仏などはもともと本堂の須弥壇上に配されることを前提として造像されており、信仰や文化的背景までも含めた文化遺産意義のより一層の理解のためにも、塩田行屋での安置状態での拝観が必要であると考えた。

塩田行屋では、所蔵仏像の3体が白鷹町の文化財指定を受けて以後、一般の拝観を随時行っていたが、不定期に訪れる拝観者の対応は管理者らの大きな負担となり、防犯の観点からも堂に鍵をかけたまま外から拝観させることでしか対応ができていなかった。宗教活動を停止した状態で、高齢者が中心の管理者らが急な坂道を登って案内をしなくてはならない塩田行屋の立地では、その対応は致し方ないことであろう。

そこで本センターでは、白鷹町の白鷹町産業振興課および教育委員会と連携して、塩田行屋の隣接地区で毎年行われている「白鷹紅花まつり」のイベントの一環として、塩田行屋の「特別拝観」を盛り込んで一般者への拝観機会を設ける企画を実践することとした（図8-43, 44, 45）。この「特別拝観」は、今までに平成24年度と平成25年度の2回開催した。白鷹紅花まつりは7月の2日間のみで開催ではあったが、白鷹町文化交流センターでの塩田行屋の展覧会による関心の高まりもあって、会期中に多くの観覧客が訪れ、塩田行屋の文化遺産に多くの関心を集めることができ、また塩田行屋の管理状況の実態を知ってもらう良い機会ともなった。さらに、来観者に拝観料としてお支払いいただいた収入は、わずかではあるが今後の管理運営費の手助けとなった。

この特別拝観の取り組みによって得られた成果は、一般の方々の関心を集めることができたことと、それによって管理者らが塩田行屋の文化的意義の重要性を再認識し、今後の管理における自発的な意識を持つに至ったことであろう。「白鷹紅花まつり」への参加は今後も継続して行う予定であり、それによって年一度の公的な開帳の機会を得ることになる。その目標ができたことによって、日頃の管理に変化がみられるであろうし、祭りの開催前には来観者を迎えるための清掃活動や整備活動が活発化することを期待している。



図8-43 第18回「白鷹紅花まつり」のチラシ



図8-44 本センターで作成した塩田行屋「特別拝観」の案内チラシ



図8-45 塩田行屋特別拝観開催中の本堂内の様子

③各地でのシンポジウムや学術的な発表による教育普及活動

塩田行屋での調査や保護活動の実践、または展覧会や講演会開催の一連の活動によって、塩田行屋の文化遺産に対する管理者らや白鷹町内の方々の関心を促進する成果を得ることができた。これらの塩田行屋での総合的な保護活動の成果は、先に述べた山形県内ないしは日本全国の地方における文化遺産の保護の実効的な対策の一例として、広く喧伝する必要があると考えた。

そこで本センターでは、本研究において中核的な対象地域として設定した西川町、大江町などにおいて現地でシンポジウムを開催し²²、塩田行屋での総合的な活動を一例として紹介することで、各地で生じている文化財保護の問題点に対する方策の提示を行った。

日本全国での文化遺産保護現場に対しては、塩田行屋の文化遺産意義やその保護活動に関する内容を研究論文としてまとめ²³、本センターの紀要論文として発表することで、その成果と意義への理解と喧伝に努めた。それによって文化財保存修復に携わっている専門家や地方自治体への理解をもとめ、より広域的な保護活動の展開に繋げていければと考えている。それらの学術的な成果発表は、文化財保存修復学会での発表においても実践しており²⁴、さらに平成25年度秋には東アジア文化遺産保存国際シンポジウムでの発表を予定し、より広範囲に本研究の意義に関する普及活動の展開を図っていく予定である。

(5) 今後の課題

保存管理については一定の成果がみられた塩田行屋での保護活動であるが、塩田行屋に安置される文化遺産には応急的修復処置だけでは補いきれない損傷を抱えている仏像が多くある。今後、それらの本格的な修復処置の実践が望まれるが、塩田行屋の100点近い数の仏像を修復するためには、多くの費用と労力が必要となる。

指定文化財となっている3点に関しては、文化財保護制度に即して町の補助金による修理費用の半額程度の援助を受けることができる。そのため、現状において最も損傷の状態が深刻な「木造如来形立像」に関しては、現在本センターでの本格的な修復実践に向けた準備を進めている。しかし、本堂に安置されている御沢仏25体などの他の文化遺産は未指定であるため、現行の文化財保護制度では修復費用を取得する術がないのが現状である。

その対策としては、先に述べた「白鷹紅花まつり」での拝観料などで修復費用を賄うことも考えられるが、その僅かばかりの収益で膨大な数を有する塩田行屋の文化遺産を全て修復していくことは困難であろう。その他の対策としては、新海宗慶・竹太郎親子が造像した「御沢仏」などの文化遺産の研究を進め、それらの公的意義を高めることで町の文化財指定を目指し、それによって修復費用の補助を受ける方法が考えられる。また、文化財保護を標榜している財団や企業などが行っている補助制度を利用し、修復費用を獲得する方法も考えられよう。

それらの複数の対策案をふまえ現在管理者らとともに検討を行っているが、現状では未だ塩田行屋が有する近世、近代の仏像文化財の評価が公的な認知を得るに至っていないため、その実現には乗り越えなければならない課題が多くある。修復費用や日常的な保護管理のための資金獲得は、塩田行屋のみならず、檀家などの支援体制を持たずに地域で共同管理されている社寺に共通する今後の大きな課題である。

4. まとめと今後の展望

地域の文化遺産の保護管理現場では、地域の過疎化の問題、管理者の高齢化の問題、宗教意識の衰退による宗教遺物に関する維持管理の問題、維持管理に関する経済的問題、未調査による歴史的・文化的背景の不明さと文化遺産意義の無認識の問題、日本の文化財保護行政制度における文化財管理に関する対応の不備の問題などが、共通する問題点として確認されている。このような地域文化遺産の管理状況の問題は、管理されるべき文化財にとって好ましくない状況を発生させることとなり、日常的な管理が滞れば文化遺産が安置される建物への人の出入りが減少することとなり、それによって建物内の換気の滞りが続くこととなる。それが、室内の環境が慢性的な高湿度な状態を招くこととなり、またそれとともに、黴の発生、虫の発生、鼠などの小動物の居住、文化財を構成する材料的側面の劣化促進などの様々な文化遺産の保存維持に関する問題を引き起こすこととなる。そして、これらのことを原因として文化財の損傷が進行していくこととなるが、人が出入りしないことによって文化遺産が受けた損傷に対して気付くことも少なくなり、気がつけば文化遺産自体が取り返しのつかない程の損傷を被ることとなる。そして、文化遺産を構成する素材や形状が大きく損なわれれば、同時に文化遺産が持っていた文化性（宗教的、歴史的、芸術的、資料的、民俗的意義を含む）も失われることとなり、それが文化遺産への関心をさらに低下させていくことへと繋がる。この一連の流れはまさに負のスパイラルといえる悪循環を引き起こし、文化遺産の保護にとって極めて悪い方へと状況を加速していくこととなる。

この負のスパイラルを如何に断ち切るかが、地域の文化財保護を行っていく上で最も重要になるであろう。しかし、地域が抱える問題は根深く、残念ながら文化財保存関係者だけではどうすることもできないことも多く存在する。地域の過疎化や少子高齢化は、日本が明治以降歩んできた経済成長により引き起こされた問題であり、その状況は全国に見られる現代日本が抱える社会問題である。そのような現状からの脱却には、地域が力を取り戻すための様々な社会的、政治的な活動による地域の活性化が必要となるが、それは文化財保存関係者が直接的に関わる問題ではないであろう。

では、文化遺産保護の観点から文化財保存関係者ができることは何があるのだろうかと考えた時、それは、地域そのものの意義を歴史文化の観点から探る取り組みであろうと考える。地域の文化的営みの中で育まれてきた地域文化遺産は、その地域文化力の根源となる情報を内包する存在であるといえる。それらの地域に根差した文化遺産の再認識やその保護活動は、どの地域にも固有に存在する地域文化力の再構築に寄与するものとなるのではなからうか。地域の活性化といっても様々な方法があり、企業誘致や観光的開発などによる方法が多く実践されているが、地域文化力の再構築こそが、根底から地域を活性化する要となるのではな

いだらうか。そして、様々な社会的問題を含む地域文化財遺産保護の負のスパイラルを止めるのは、地域の活性化の要であり地域文化力の根源である文化遺産保護の活動から始めることにあり、それが正のスパイラルへと転換させるための有効な手段ではないかと考えている。

これらの活動によって、地域文化遺産の管理者や地方自治体の保護意識の高まりを促すこととなり、地域文化遺産を保護していくための基盤をつくることができるであろう。しかし、文化遺産の保護に必要な維持管理に関する現実的な経済問題に対する対策も必要となる。この経済的な問題は、文化遺産の管理施設の整備や個々の文化財の修復などにおいて発生する費用の問題となって現れる。しかし、多額な費用をかけずとも、簡便な方法での保護活動によって文化遺産の保護を行う手立てでもあるのではなかろうか。それが、文化財が健全な状態を保つための清掃活動や簡易にできる応急的な修復処置であり、抜本的な問題の解決はできずとも一時的な延命処置として極めて大きな成果をもたらすことができると考える。またその活動による効果は物質的な改善にとどまらず、管理者らの保護意識を高めることにも繋がるのである。

本発表で文化遺産保護活動の一事例として報告した塩田行屋での活動は、その地域文化遺産をめぐる負のスパイラルから脱却するための一方策であり、調査、清掃活動、応急的修復処置、保護体制の構築、文化遺産意義の喧伝(展覧会・特別拝観)、保存管理費用および修復費用の獲得などの一連の活動の実践であった。その成果は今後の地域文化遺産の保護活動に対する具体的な提案として示すことができたのではと考えている。

地域の文化遺産はだれが守るのか。それは代々文化遺産を継承してきた地域の住民を中心とした管理者らである。また、それらを指定し、保護していくための行政的保護活動は、地方自治体の教育委員会などの責務であろうし、町の文化施設は、地域の文化や地域文化遺産の意義について喧伝していくことがその役割であると思われる。そして、文化財保存の有識者はその専門的な知識と技能を発揮し、それらの保護活動を支えていく役割を担っているのである。つまり、文化財に関わる人々が、それぞれの役割を果たしながら、目的を一にした活動を連携しておこなっていくことでのみ、地域文化遺産の保護が可能となると考えている。

今後、本研究における成果をもとに、他の地域での活動を展開していきたいと考えている。課題はまだまだ山積しているが、少しずつ連携の輪を広げ、日本文化を下支えしてきた地域文化の保護に貢献していきたいと考えている。

注

- 注1) 塩田行屋での保護活動の取り組みは、研究論文、岡田靖・宮本晶朗「展覧会およびその調査から展開する地域文化遺産の保護活動～白鷹町塩田行屋の仏像（町指定文化財および新海宗慶・竹太郎作の明治期諸像）を事例として～」『平成23年度東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター紀要No.2』において詳述している。合わせて参照いただきたい。
- 注2) 本センターでは、対象地域でのシンポジウムとして、平成24年8月5日に西川町において「地域文化遺産シンポジウム 歴史の声を聞く ―地域文化遺産の保護に向けて―」を、平成24年12月22日に大江町において「地域文化遺産シンポジウム 歴史の息吹を感じる ―地域文化遺産の保護に向けて―」を開催し、塩田行屋での保護活動の取り組みを含めた発表を行った。
- 注3) 塩田行屋の新海親子による仏像の文化遺産意義についての研究は、研究論文、岡田靖・宮本晶朗「新海宗慶（宗松）および少年期の新海竹太郎の造形的特徴における新知見～神仏分離に伴う古仏修理から得られた造形理解に関する考察～」『平成24年度東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター紀要No.3』において発表した。
- 注4) 平成24年度に開催された文化財保存修復学会第34回大会および平成25年度に開催された文化財保存修復学会第35回大会において、塩田行屋の保護活動の取り組みについて発表した。発表内容は、岡田靖・宮本晶朗「展覧会およびその調査から展開する地域文化遺産の保護活動―山形県白鷹町塩田行屋の仏像文化財を事例として―」『文化財保存修復学会第三十四回大会研究発表要旨集』および岡田靖・米村祥央・長坂一郎・半田正博・北野博司・大山龍頭・大場詩野子・長田城治「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」『文化財保存修復学会第三十五回大会研究発表要旨集』を参照いただきたい。

青苧と和紙からみた地域文化力の向上

大山龍頭

1. はじめに

(1) 素材研究について¹⁾

文化遺産を構成する要素として地域を背景とした素材が用いられることも多くみられ、表現だけでなく地域と素材との関係性も地域文化の価値を担う要素とみることができる。対象地域の大江町では青苧の特産地であった背景があり、西川町では紙漉きも盛んであった。それらの素材は生活と共にあり、その積み重ねが地域文化遺産に集約されていたという側面を持っている。しかし、社会の変化に伴って生活も変わり素材との関係性も変化することで、地域文化遺産との距離感は遠くなった。生活との距離感が遠くなることで文化遺産を保存継承する上でも障害となることは多くみられる。逆に歴史的風土が生活と近い部分では文化遺産も継承される土壌を残しているといえよう。そこで、素材との関係性を新たに現代生活に結びなおすことで、生活とのつながりから作品保存の意義を見出すことができないかと考えた。幸い、大江町の特産であった青苧は紅花と並ぶ山形の特産であり町内に復活させようという取り組みも見られた。また西川町の和紙は現在も受け継がれている。これらの素材と技術を糸口にして新たな麻紙を生み出すことを思い立った。本研究は麻紙制作を通じた活動を展開し、地域の文化遺産を構成していた素材と地域の関係性を再構築することで、再び文化遺産の見直しを図り、地域文化を支える力「地域文化力」が向上することを目的としている。

(2) これまでの取り組みと課題¹⁾

平成23年度は基礎調査として、各地の紙漉き技術と実情の調査と青苧紙の試作を行ってきた。また、福島県昭和村で青苧への聞き取り調査を進めた。

各地の楮紙や、古代の製紙法と、試作した青苧紙を改めて比較したことで、原料による製法の違いや現代の手漉き和紙の製法を見直すことにつながり、平成23年度に試作した紙が楮紙と古代の技法の混合技法であったことを再確認した。

青苧紙制作の課題は、一つは製紙にかかる労力の軽減で、そのための原料処理と工程の見直しが必要であることと、実際に漉くと楮と同じように漉くことは難しいため、紙漉き技法と漉く際の道具についても検討する必要があることが明確になった。取り組みを始めたことで、成果も生まれており、

青苧の紙による新たな商品としての可能性が生まれ、和紙に関する文献調査から山形の紙漉きは近世には紅花や青苧出荷のために盛んに行っていたことが再確認され、地域の特産をとらえ直すことにつながったこと、大江町の青苧復活夢見隊と西川町（三浦一之氏）との交流が生まれたことなどは初動の成果となっている。

また、青苧紙作成に向けた方向性としては、岩野平三郎氏が明治期に麻紙復活に取り組んだ際に、当時の日本画家といった使用者と連携して取り組み、新たな製法や用途を開拓したことは今後も参考になるとみられる。楮とは異なる大らかな苧麻の風合いも紙の特色となっている。

2. 地域と素材の関係性

(1) 各地域の取り組み

青苧の取り組みは大江町だけでなく、山形県内の南陽市や高島町、福島県昭和村でも行われている。

また、和紙についても伝統を維持することでは課題が多い。各地での復興や振興といった取り組みをみな



図9-1 対象地域の紙漉き調査地

がら、大江町における青苧紙作成の方向性を確認することとする。

<昭和村>¹

昭和村は小千谷縮や越後上布などの最上級の麻布の原料供給地として全国的に知られた「からむし」の産地である。原料供給に留まらず栽培から製造まで行う体制を整備し、大麻を用いた農作業着制作の一連の技術を「からむし」に取り入れ、村内で一貫した技術習得を可能にした。また、独自に村へ留学して技術を学ぶ「織姫制度」という研修制度を設ける活動を行い、研修生が定住することで人口増加に繋がるなど、地域特産を活かした活動として成功している。その背景には、「からむしを絶やすな」という教えのもと連綿と受け継がれてきたことが欠かせない。調査時に伺った話からは、技術の必要な繊維採集の「苧引き」に、未習熟者や子供達も「わたくし」という程度の低い繊維を作成する幅のある参加体制をとり、技術習得を行ったことが分かった。子供たちが小遣いとして地域の経済活動に参加することで地域特産に誇りと自覚が芽生え、世代間の継承を進める意識の向上に結び付いていたことが窺える。因みに、昭和村でもからむしを用いた和紙制作が行われ、卒業証書を作成したことがあるという。しかし、産業や継続的な形にはならなかった。

<全国手漉き和紙青年の集い>

各地の和紙の産地ではどのような取り組みがなされているか、全国手漉き和紙青年の集い2012山形大会が開催された際、参加していた各地の紙漉き職人の方を対象に和紙資料の収集と制作についてのアンケート調査を行った¹³¹。アンケートからは使用用途には障子紙や書画用紙、賞状作成が多くみられた。中には、一度途絶えて復興した和紙、或いは自分で作り始め新たに創造した和紙もあり、伝統的と捉えられ易い和紙も様々な継承の形の中で各地の特色を活かした和紙となっている。紙漉きの方のコメントでは使用者との関係性で和紙を捉える視点と、作品として見る視点もみられ、多様な価値観となっていた。産業としては和紙の「用途」が維持継承されることが重要な要素となっている事が窺えた。

・大会概要

第36回全国手漉き和紙青年の集い2012山形大会

日程：平成24年9月28日、29日

会場：西川町「西川交流センターあいべ」他

参加者：70名



図9-2 第36回全国手漉き和紙青年の集い2012山形大会

<地域振興の取り組み>

地域振興に関する取り組みは近年各地で盛んになっているが、高知県や岡山県では大江の青苧と似た地域の特産品を見直して地域振興の取り組みがみられた。岡山県の西粟倉村では特産の和紙原料の「三極」によりお札用の局紙の原料として再活用して地域振興につなげる取り組みも行われている¹³²。高知四万十川流域でも「四万十ドラマ」などデザインを活かした高知四万十川流域の産業を再生する取り組みが行われている。河川流域文化の再興という点で四万十川の取り組みは興味深く、平成7年～「四万十のひのき風呂」「しまんと紅茶」「しまんと地栗」などの商品開発を進め、平成17年には四万十川流域で販売するものはすべて古新聞で包むというコンセプトにした「しまんと新聞バッグ」を広めるなど、素材をデザインで捉えなおす視点は注目される¹³³。特に地元銀行と組んで、商品をノベルティグッズ化して販路を確保する手法は、市場競争により衰退した伝統産業にとって注目される商品展開の方法といえる。

<大江町>¹

青苧に適した気候風土を利用して現在の大江町全域と朝日町の両五百川方面にわたって特産品として産出され、七軒七夕畑の青苧は「七軒苧」と呼ばれ、最高級品とされた²。しかし明治期以降、産業が推移して減少し現在では殆どみられない。大江町における青苧栽培は「大変な仕事」¹³⁴として記憶されており、地域の中に肯定的な印象を聞くことが少ない。その理由には、原料供給地との認識というよりも、すでに産業としては養蚕や林業に移行しており、青苧は下駄の鼻緒や縄の素材といった日用素材という認識が強かったという背景が窺える。

<青苧復活夢見隊の取り組み>¹

元町職員の村上弘子氏が発起人となって平成20年に10数名の有志と共に青苧特産づくり支援隊を発足。

転作田を利用した青苧栽培を行い、青苧を用いた様々な商品を開発している。苧麻繊維の原料供給地であった背景を踏まえ、苧麻の織物作成にとどまらず、青苧を原料とする「真麻うどん」や、青苧を食品とする「青苧御膳」の提供、床ずれをし難いという点を利用した敷パッド（寝具）といった様々な商品開発から青苧を見直す取り組みを行っている³。苧麻の表皮を削いで繊維を採取する「苧引き」は大変という意見が多く聞かれ、「苧引き」の負担軽減は課題となっている⁴。

(2) 各地の取り組みから

青苧の取り組みが長く続いてきた昭和村では世代間継承にむけた取り組みや、研修制度による外部の受け入れなどにより、文化の継承と青苧繊維の質の向上が図られている。結果的に地域にとっての青苧の方向性の再確認につながり、労働力の確保や繊維の魅力の普及に繋がっている点は参考にすべき点とみられる。しかし、一方で大江町の取り組みでは取り組みの出発点が異なっている。

昭和村ではからむしの糸に伝統を見出しているのに対して、大江町では青苧を素材とみており、必ずしも繊維のみというわけではない。そのため、大江町独自の方向性を見出すことが課題となっている。そのなかで、青苧復活夢見隊では食品などに取り入れ新たな展開を図っており近年の地域振興の流れとも合致している。大江町では青苧繊維を用いて織物などにするといった取り組みは、「苧引き」の負担もあって順調に進展しているとは言い難い。原料供給だけでなく、いかに実際に製品を作り上げて形にして達成感を獲得するかが、今後の継続、発展につながる要素として必要ではないかと思う。

また、和紙産業も今日では衰退が進む現状がある。完成した製品ではありながら、それ自体も素材として使用用途が必要となっているため、青苧の紙にもまた、使用用途を見出すことは変わらぬ課題となっている。紙料としては楮の3倍の労力があるといわれる苧麻繊維のため、価格は高騰することが予想されることから、他にない使用用途で特殊性を活用する必要があり、麻、苧麻の紙が日本画用紙として用いられることは納得がいく。そのため、書画用紙、賞状などには用途を見出せると考えられ、実際に賞状にはなった。

地域の特産は最終的には販売されなければ継続することはできないが、岡山の三極や高知の四万十ドラマの取り組みは今後の参考として、青苧展開にも反映する余地があるとみられる。

3. 青苧紙

平成23年には青苧の試作に辿りついたが、楮の3倍かかるという労力から容易に紙とすることも難しいことが再認識された。そこで、青苧の和紙の特性を見直し、今後の青苧紙の方向性を考察する。

(1) 苧麻の特性

植物繊維中、繊維が最も長い。しかし、その分製紙は難しく、表面がざらざらとして柔らかな風合いの紙ができる。楮とは異なる風合いはそのままでは文字を書くなどといった作業にも容易にはなじまない。書家（山形在住、鈴木蘭華氏）の使用感としては独特の質感に面白味があるといい、「墨のにじみが面白い」⁵といった感想がでる。

かつて、岩野平三郎氏が取り組んだ麻紙を試作した際にも同様の言葉（牧野信之助、日本史学者）。「(中略) 淡い墨や滲み具合が一種異なっている (中略) 必ず文墨に革新を起こす」⁶が見られ、苧麻には風合いに特徴があり、墨を使い慣れた人間が見ると、荒い繊維の表面に素材としての個性を見出す要素があることがわかる。

興味深いのは当初は墨の表現に主眼が向いていたことで、現代では岩絵の具を主体とする日本画制作で使用するが多い麻紙とは特徴として見ている点が異なっていることである。墨の表現から岩絵具を主体とする絵画表現に移行したことで麻の繊維が用いられる意味もまた変化したとみられる。

(2) 製法の課題

<風合いと比率>⁷

青苧のみで紙にすることは非常に難しい。漉箕から離れが悪く、均一に抄紙することは楮紙製作に熟練していても困難であるという。そこで、楮と青苧の混合比を変えながら漉きあげた和紙をもとに、漉きやすさという点から検証した。紙の製法自体は楮紙（西川町、月山和紙）の製紙方法をもとにしている。その結果、青苧100%では箕から剥がす際に容易に剥がせず、損傷や気泡が入りやすい。

青苧50:楮50、青苧30:楮70と比率が減ると青苧の風合いは減るものの紙になりやすい。当然だが風合いはいわゆる楮紙に近い紙ができる。この結果をもとに、今年度は青苧復活夢見隊と三浦一之氏の協力により廃校となる大江町本郷小学校の賞状作成が行われた。

<漉き方と道具>

素材を活かした紙の製法を考える上でこれまで楮紙の製法をもとに取り組んできた。麻紙と楮紙の違いは工程だけでなく、使用する道具や製法にも違いが必要とみられる。

苧麻を使用する紙の事例は、日本画用紙(高知麻紙/高知県)か古代の紙⁵に見出すことができる。

平成24年度は苧麻により和紙制作を行う高知県高知麻紙の尾崎金俊製紙所の調査を行った¹⁷。

尾崎金俊製紙所では原料に苧麻と楮を使用しており、日本画用紙などのさまざまな用途に供給している。平成23年度に調査を行った雲肌麻紙では麻(大麻)であったが、尾崎金俊製紙場では、苧麻の繊維を細かく裁断して使用しており、漉き方も通常の手漉きとは異なる独特の方法により抄紙を行っている¹⁷。

素材の違いもあり、同様に麻紙という名称ではあるものの、大麻を用いる雲肌麻紙とは異なった風合いの紙となっており、改めて紙の風合いをみると、苧麻の風合いが良く現れている。

古代の紙の資料として、正倉院の紙資料の組成では主流というわけではないものの、麻の紙も確認されている⁵。麻紙は表面を平滑にする打紙加工や填料として米粉の添加など料紙として用いやすいように工夫されており、抄紙後に表面を加工することは現代ではあまり見られなくなった工夫となっている。簀目に紗目がある紙も確認され、紗を使用した形跡もある。紗漉きの紙は現代では雁皮紙などが知られている。今後、青苧紙を制作する際に「填料の添加」や「漉き簀(紗)」といった工夫も有効とみられる。



図9-3 尾崎金俊製紙所

<原料の確保>

大江町における青苧を用いた紙制作の初期動機の一つは、高齢化や人員不足から労働負担となっている「苧引き」を省略したいという願望があった。また、実際に紙を試作する中で、青苧紙の原料と繊維用の原料が共存できなければ、青苧紙を制作する意義も失われかねないといった課題が浮き上がっている。そこで、苧引きをせずに繊維のみを採取する方法として、煮熟と熟成製錬⁶(レチング)による繊維採取の方法を検討した。古代の麻紙制作では、煮熟についても熟成製錬(レチング)についても触れられていない。しかし、中国の製紙などでは竹の繊維を紙料とする際、石灰に漬けるといった工程が知られている。

その結果、茎から表皮を剥いだ後、木灰の灰汁でそのまま煮熟後に灰汁に漬けて3カ月程度レチングすることで、表皮のみを除去できることが確認された。できるだけ苧麻繊維を傷めないように煮熟をしない方法も考えられたが、表皮を全て取り除くことはできず、より長期間のレチングが必要と思われる結果となった。レチングを用いる利点は「苧引き」の労力を軽減できるだけでなく、煮熟により表皮を除去するため、枝などの生えた跡の「はな」があってもよいことで、9月頃に収穫される2番苧や、成長すぎた茎繊維の利用といった繊維とし難い部位を利用できる可能性がある。また、7~8月頃に収穫される繊維用青苧と区別ができることで、紙の材料を確保しながら、繊維と共存を図っていくことが可能となるとみられる。



図9-4 灰汁(煮熟なし)

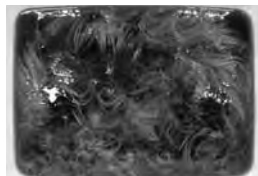


図9-5 灰汁(煮熟あり)



図9-6 水洗後(左:煮熟なし 右:煮熟あり)



図9-7 レチングした青苧繊維(左:煮熟なし 右:煮熟あり)

<製作者の育成と継承>

青苧紙を制作する現在の課題は抄紙を西川町の三浦一之氏に依存していることもあげられる。

三浦一之氏は西川町大井沢の「自然と匠の伝承館」建設時に迎えられ、現在は自分の工房を構えて紙を漉いている。和紙文化も後継者の問題は大きく、西川町も例外ではなかった。西川町の和紙はかつて西山和紙として知られていた。西山和紙は昭和30年代の高度経済成長期に紙漉きが激減し、岩根沢の飯野博雄氏が月山和紙と名を変え平成7年には独り守っていた。大井沢自然と匠の伝承館に工房が設立された際に高齢のため使用を辞退したため、当時埼玉県小川町で修業していた三浦氏の招聘へと至った¹⁸⁶経緯がある。大江町の青苧同様、後継者問題は西川町の月山和紙（西山和紙）の抱える問題でもある。

<大井沢自然と匠の博物館>

西川町、大井沢にある自然と匠の伝承館は昭和26年、大井沢小中学校で学校教育の一環で行われた自然研究から発展し、昭和28年に県教育委員会が計画して校内に資料展示をして「大井沢自然博物館」と名付け、翌昭和29年には県の博物館指定を受けた。昭和45年に旧大井沢自然博物館が設立し、平成元年に現在の博物館が伝承館とともに落成して今に至っている¹⁸⁸。伝承館に設置された紙漉き工房の設備は本格的で、体験教室なども行われている。三浦氏の使用している楮の処理なども行っている。

<楮蒸し会>

本研究事業内では、大江町の青苧紙と同様に、西川町の月山和紙支援のため、平成22、23年度に岩根沢で栽培されている原料の楮を「刈り取り」～「皮むき」まで行う作業を支援する「楮蒸し会」を三浦一之氏の作業に合わせて実施した。文化財保存修復研究センターの研究員と参加学生（平成22年度4名、平成23年度3名）により参加し、三浦一之氏や地元の協力者と共同作業を行い、楮の刈り取り、楮蒸し、皮剥ぎといった作業工程の実体験と三浦氏の工房見学を行った。近年、美術系大学でも素材に関する意識が高まり、三浦一之氏も大学で紙漉き授業を行っている。しかし、実際に材料となる楮の刈り入れから体験する機会は多くはないため、今後も継続した支援体制の構築が課題となっている。



図9-8 自然と匠の伝承館内 和紙工房

4. まとめと今後の展望

本年度は青苧の取り組みを整理し、今後の方向性を見出す調査研究が中心となった。その間にも大江町の青苧復活夢見隊と西川町の三浦一之氏は交流を深め、大江町本郷小学校の卒業証書作成に至ったことは大きな出来事であったといえる。楮と混合することで書画用紙にすることはある程度できるところまで来ているものの、今後の展開や発展については課題が多い。青苧の繊維は処理が難しいことは変わっていないものの、煮熟とレチングによる紙用繊維の採取により青苧紙作成にむけての確保に進展がみられたことは、成果となっている。

書画用紙としての活用から創作活動に使用する達成感を見出すことが、地元にある多くの文化遺産の再評価へと続くことを目指して始まった研究事業だが、まずは青苧紙の筋道をつける事が目標となっている。次年度は今年度の検証結果を踏まえて、実際に青苧繊維の煮熟とレチングによる繊維採集を行う。紙漉きの道具についても検討を進めたい。また、自然と匠の伝承館の設備を用いて、紙漉き講習会を開き、西川町の紙漉き技術の普及にも力を入れる予定である。

来年度実施予定は以下の通り。

- * 地元での展示などによる教育普及活動（詳細は未定）
- * 大井沢伝承館内工房での本格的紙漉き講座の実施（11～12月を予定）
- * 煮熟と熟成による和紙用青苧繊維の採取（9月頃）
- * 素材の検証 青苧繊維の処置方法や評価方法の確立（外部機関との協力による）。
- * 麻紙作成地調査（栃木県、鹿沼）（新潟、越後）
- * 県内紙漉き調査（深山和紙、高松和紙、舟形和紙、東根市）

注

- 注1) アンケートは紙収集に合わせて、名称・制作者・寸法・制作時期・原料・原料処理・ネリ剤・製法・乾燥・特徴（用途など）について記載して行なった。16か所の紙漉き地、計33か所の和紙を収集した。
- 注2) 岡山県で三桎による和紙作りに取り組んでいる東馬場洋氏への聞き取りによる。聞き取りは全国手漉き和紙青年の集い2012山形大会において行った。
- 注3) 東北芸術工科大学大学院仙台スクール公開講義『地域の本質的価値を活かすデザインと地域振興』（講師、梅原真氏）平成24年12月18日
<http://www.pref.akita.lg.jp/www/contents/1327041239481/index.html>
<http://www.shimanto-towa.jp/about/>
- 注4) 青苧復活夢見隊、村上弘子氏への聞き取りによる。
- 注5) 書道家、鈴木蘭華氏は書の楽しさを伝える『あそびま書』教室を大江町でも開いている。
- 注6) 月山和紙製作者、三浦一之氏への聞き取りによる。
- 注7) 高知麻紙、尾崎金俊製紙所における紙漉き調査による。（平成24年11月28日実施）
- 注8) 大井沢自然博物館公式HP（<http://oohaku.town.nishikawa.yamagata.jp/>）より。

参考文献

- 1) 「文化財保存修復研究センター研究成果報告書」東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター、2012
- 2) 『大江町史』大江町教育委員会、1984
- 3) 『蘇りの青苧ものがたり―青苧復活夢見隊の軌跡―』大風印刷、2012
- 4) 『史料 絵絹から畫紙へ―岩野家所蔵近代日本畫家・学者達の書簡集』岩野家所蔵書簡集刊行会2001
- 5) 「正倉院宝物特別調査 紙(第2次)調査報告」『正倉院紀要 第32号』正倉院、2010
- 6) 穴倉佐敏『古典籍古文書 料紙事典』八木書店、2011

X. 教育普及活動の実践

平成24年度の教育普及活動について

大場詩野子 長田城治 長坂一郎 藤原 徹 半田正博 森 直義 北野博司
米村祥央 岡田 靖 大山龍顕

1. はじめに

本研究プロジェクトは、調査成果を地域に還元して初めて研究の成果として位置付けられることが出来る
と考える。これは、地域住民の方々が文化遺産の保護の直接的な担い手として重要な存在であり、それらを
継承していくためには、文化遺産が如何に地域の中で重要なもので、どのような歴史があり、これまでどの
ようにして守り伝えられてきたのか、文化遺産の価値の認識が保護の第一歩となると考えられるからである。

そのため本年度は、表10-1に掲載した活動を実施し、テーマ1で掲げる地域文化遺産の価値の創出の対す
る研究成果の公表を行い、テーマ2で掲げる文化遺産の保護に向けた取り組みとして実施した。特に研究対
象の3町において本センター主体のシンポジウムを開催し、住民の方々にその成果を公表すると共に、調査・
研究を通じて判明した地域の問題点や今後の対策について意見交換を行った。また、各研究活動をまとめて
パネル展示をした展覧会の開催や、各自治体などが主体となった講演会での発表、学会などへの論文の投稿
および発表を行い、研究成果の公表に尽力した。そこで本稿では、地域住民の方々を対象したシンポジウム
や展覧会について、その内容を詳述する。

表10-1 今年度実施したシンポジウム、展覧会等一覧

分類	タイトル	時期	場所	主催・共催	講演・発表・パネラー参加
研究成果 報告会	平成24年度 研究成果報告会	H25.3.2	東北芸術工科大学	東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター	長坂一郎、北野博司、 米村祥央、岡田 靖、 大山龍顕、大場詩野子、 長田城治
シンポジウム・ 現地報告会	高島石と安久津の歴史を語る	H24.4.17	高島町安久津公民館	主催：高島石の会 共催：東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター	北野博司、長田城治
	高島石の歴史を紡ぐ —未来への活かし方を求めて—	H24.4.21	高島町総合交流プラザ	主催：東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター 共催：高島石の会・ 高島町教育委員会	長田城治、 渡部 桂、 遠藤周次（高島石の会） 清水一文 （兵庫県 高砂市教育委員会） 鈴木裕士 （金谷ストーン コミュニティー）
	西川町×東北芸術工科大学 地域文化遺産シンポジウム 「歴史の声を聞く —地域文化遺産の保護に向けて—」	H24.8.5	西川町交流センター あいべ	主催：東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター 共催：西川町教育委員会	米村祥央、 岡田 靖、 大山龍顕、 岩鼻通明 （山形大学農学部）、 那須恒吉 （西川町文化財調査委員）
	戸塚山175号墳発掘調査現地説明会	H24.11.1	米沢市大字上浅川	東北芸術工科大学	北野博司
	大江町×東北芸術工科大学 地域文化遺産シンポジウム 「歴史の息吹を感じる —地域文化遺産の保護に向けて—」	H24.12.22	大江町東地区公民館 （町民ふれあい会館）	主催：東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター 共催：大江町教育委員会	長坂一郎、米村祥央、 岡田靖、長田城治 菊地和博（東北文科大学 短期大学部）
展覧会	地域文化遺産と保存修復 —文化財保存修復研究センター 10年の取り組み—	H24.10.25 ～11.7	東北芸術工科大学	東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター	長坂一郎、藤原 徹、 半田正博、森 直義、 北野博司、米村祥央、 岡田 靖、大山龍顕、 大場詩野子、長田城治
検討会	山形の遺跡調査検討会 「戸塚山175号墳の発掘調査」	H25.2.17	山形県立風土記の丘 考古資料館	山形考古学会	北野博司
講演会	高島町文化財保護会講演会 「高島石の里まちあるき」	H25.3.28	高島町総合交流プラザ	主催：高島町文化財保護会 共催：高島町観光協会 高島石の会	長田城治

2. 調査地域におけるシンポジウム

(1) 高阜石の里まちあるきシンポジウム

「高阜石の歴史を紡ぐ」—未来への活かし方を求めて—

主 催：東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター

共 催：高阜石の会・高阜町教育委員会

実践日：平成24年4月21日 13:00～16:30

会 場：高阜町総合交流プラザ

講演タイトル・発表者：

- ・「高阜石のある町並み～高阜石の生産と集落景観～」長田城治
- ・「私と高阜石」遠藤周次（高阜石の会）
- ・「高阜石を活かしたまちづくり」渡部桂（東北芸術工科大学）
- ・「歴史文化を活かしたまちづくりに向けて～兵庫県竜山石切場の取り組み～」清水一文（兵庫県高砂市教育委員会）
- ・「“石と芸術のまち”金谷の町おこし」
鈴木裕士（金谷ストーンコミュニティ）



山形県高阜町は凝灰岩を基盤とする丘陵に囲まれ、ここから産出する高阜石はこの地に人々が定住しはじめた1万年前から、貴重な石材資源として住民の暮らしを支えてきた。現在日常の風景として目に映る「高阜石のある町並み」は、その積み重ねであり、「高阜らしさ」を語るうえで欠くことのできない大切な財産である。しかし高阜石採掘の歴史や技術、利用の実態については、まだ十分明らかにされていない。現在、高阜町教育委員会、高阜石の会、地域住民の方の協力を得て行なっている高阜石の調査とその成果を始めと

し、そこから読み取れる土地の歴史や町並みの文化的価値、さらにその継承・発展について講演を行った。講演は、高阜石に関する発表を当センターの長田城治、遠藤周次氏（高阜石の会）、渡部桂（東北芸術工科大学）が行い、他の石材産地の調査やその活用についての発表を清水一文氏（兵庫県高砂市教育委員会）、鈴木裕士氏（金谷ストーンコミュニティ）が行った（図10-1）。現地の石工や石屋など高阜石に関わる人をはじめ、地域住民の方40名が参加し、利用者の視点から貴重な意見が出された。



図10-1 シンポジウム風景

また、本シンポジウムに先駆ける4月17日には、石切丁場と距離が近く、石工が数多く居住した安久津地区の調査を行ったため、調査地である安久津公民館にて、地域住民を集めた調査報告を兼ねる座談会を実施した。ここでは、より狭い地域の中での石工の営みやその歴史、安久津ならではの文化的背景に即した石材利用の特徴などを報告し、参加者との懇親を楽しみながらの意見交換会を実施し、今後の保存について議論を重ねた（図10-2）。



図10-2 安久津公民館での座談会

なお、高阜石の研究は、来年度ブックレットの出版を通して、現地の住民の方に成果を報告し、高阜石を用いた体験イベントなどを行う予定である。

(2) 地域文化遺産シンポジウム

「歴史の声を聞くー地域文化遺産の保護に向けてー」

主 催：東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター

共 催：西川町教育委員会

実践日：平成24年8月5日 10:00～12:30

会 場：西川町交流センターあいべ

講演タイトル・発表者：

- ・「安中坊遺跡の整備・活用について～文化財調査委員会の答申を中心として～」那須恒吉（西川町文化財調査委員）
- ・「出羽三山信仰と21世紀の広域交流圏」岩鼻通明（山形大学）
- ・「仏像調査からみえる西川町の歴史文化ーその保護と継承ー」岡田靖
- ・「絵画調査と応急処置ー獅子ヶ口諏訪神社の絵馬を中心にー」大山龍頭
- ・「地域文化遺産の保護における保存環境改善の具体例」米村祥央



西川町は、中世には後に西村山地方を席卷した大江氏が吉川の地に居を構え、近世には出羽三山信仰が最盛期を迎え、旧本道寺・大井沢大日寺・岩根沢日月寺を中心に多くの参詣客が全国から訪れた。また、西川町を横断する出羽三山の参詣路である六十里越街道は、鶴岡や山形と繋がる重要な物流路としても利用され、街道を通じて多様な文化が西川の地にもたらされた。以上のような歴史や文化の痕跡は、仏像や絵馬といった地域文化遺産に表れているが、その価値は見出されないまま埋もれているのが実情である。

本シンポジウムでは、そのような歴史文化遺産を対象に、テーマ1の調査で得られた成果を基にして、本研究員の岡田が大江氏や出羽三山信仰に関する仏像について発表した。出羽三山信仰関係の仏像が京都と深い繋がりを示し、都の文化が山形の地に流入し根付いたこと、江戸期の出羽三山参詣により、大きな富と多様な文化がもたらされたことが仏像文化遺産からも窺い知れたことを発表し、同町内に貴重な仏像文化遺産が存在することを報告した。また研究員の大山は、民間信仰の拠点として獅子や絵馬の奉納品が数多く残る獅子ヶ口諏訪神社について発表し、絵馬の特徴や現状の損傷状態、保護に向けた取り組みについて報告した。一方、研究員の米村は、主にテーマ2に対する研究成果を報告し、特に旧本道寺仁王像のX線撮影、環境調査およびIPMについて活動報告を行った（図10-3）。

本研究員以外にも、那須恒吉氏（西川町文化財調査委員）は安中坊遺跡の整備とその活用、岩鼻通明氏（山形大学）は現在における出羽三山信仰のあり方や法令を順守した際の保存の問題点や可能性について講演した。小川一博氏（西川町町長）をはじめ、地域住民の方が約90名の参加者を得た（図10-4）。



図10-3 発表の様子



図10-4 会場風景

(3) 地域文化遺産シンポジウム

「歴史の息吹を感じる―地域文化遺産の保護に向けて―」

主 催：東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター

共 催：大江町教育委員会

実践日：平成24年12月22日 9:30～12:30

会 場：大江町東地区公民館（町民ふれあい会館）

講演タイトル・発表者：

- ・「大江町の文化を育んだ歴史民俗的背景」
菊地和博（東北文教大学）
- ・「地域文化に根差した造仏活動―林家仏師一門を中心に―」
岡田靖
- ・「小清地区の民家と集落―住生活にみる地域文化の変遷―」
長田城治
- ・「大江町文化遺産の総合的保護活動について」米村祥央



最上川の中流域に位置する大江町は、酒田へと繋がる舟運や置賜・山形からの陸路の要所として発展し、特産物であった青苧の流通や出羽三山信仰の往来地として豊かな文化を育んだ歴史を持つ。

本シンポジウムでは、テーマ1について、研究員の岡田が、江戸末期から明治期にかけて親子4代に渡って大江町左沢原町を拠点に活躍した林家仏師一族とその仏像についての研究成果を発表し、それらの仏像から地域の風土や気風に適応しながら独自の像仏活動を展開した様子が窺い知れること、それらの貴重な仏像が数多く残りながらも、その価値が認識されておらず、地域の中に埋もれてしまっている現状などを報告した。

また研究員の長田は、茅葺民家が数多く残る小清集落について発表を行い、民家の形式が山形県村山・置賜・庄内地方の特徴が混在している特異な形式であること、茅葺民家が段々状に点在する風景が近世時代を思い起こされる価値の高い景観であることを報告した。一方米村は、テーマ2に関して社寺での環境調査と青苧を原料とした和紙の開発による地域文化力の向上を目的とした取り組みについて発表し、文化遺産の保護には地域住民の協力が不可欠なことを示した。



図10-5 受付スペースでのパネル展示

また、菊地和博氏（東北文教大学）により、大江町の文化を育んだ歴史民俗的背景について、最上川舟運による経済効果が町場と山間部の暮らしに影響し、現在の文化が育まれたことを指摘した。

これらの講演のほか、来場した方に研究活動内容についてより深く理解してもらうよう、会場の入り口付近ではパネル展示も行った（図10-5）。

本シンポジウムでは地域住民を中心に、富樫是行氏（大江町教育委員会教育長）と林家の御子孫を含めた約100名が出席し、最後に行なったパネルディスカッションでは出席者からの質問をもとに、活発な討議が行なわれ盛況を博した（図10-6）。



図10-6 パネルディスカッションの様子

3. 展覧会

「地域文化遺産と保存修復

—文化財保存修復研究センター 10年の取り組み—

主 催：東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター

実践日：平成24年10月25日～11月7日（日、祝日休館）10日間

会 場：東北芸術工科大学図書館2F スタジオ144

発表者：長坂一郎、藤原徹、半田正博、北野博司、森直義、
米村祥央、岡田靖、大山龍顕、大場詩野子、長田城治

(1) 概要

約2年間の研究プロジェクトの成果をまとめ、地域住民の方々にその活動を広く認識していただくため、研究内容ごとにパネルを制作・展示する展覧会を開催した。また、本センターの設立10周年を記念して、修復事業の内容についても展示パネルを制作し、研究と修復事業という本センターの2大事業の成果を一同に会する展覧会として企画・運営した。展示内容は、主に以下の3つに分けられる。

- ① 「総合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」(文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業)における地域文化遺産の調査保存研究活動
- ② 受託事業の紹介(東洋絵画、西洋絵画、立体作品、古典彫刻の各分野での修復活動、保存科学、美術史、考古学の各分野での調査・研究活動)
- ③ 東日本大震災によって被災した文化財の救援活動

特に①では、研究の趣旨を説明するとともに、和紙と青荳、古民家、仏像(林家)、高島石と遺跡、西川町旧本道寺仁王像のX線透過写真などのテーマに沿ったパネルを展示した。

また、会期中に各研究員がそれぞれの専門分野や研究の内容についてトークショーを行ない(図10-9)、住民や学生に向けて広く活動の実態やその成果を示した。これらの展示やトークショーを通して、センターの活動全体を多くの方々に理解していただくことができたと考える。(大場・長田)

(2) トークショー内容

10月25日 17:00～18:00

「東洋絵画修復」半田正博

10月26日 17:00～18:00

「西洋絵画修復—文化財を守るのは誰か?—」森直義

10月30日 17:00～18:00

「保存科学」米村祥央

11月1日 17:00～18:00

「地域文化遺産の保存」岡田靖、大山龍顕、大場詩野子、長田城治

11月2日 17:00～18:00

「立体作品修復」藤原徹

11月3日 17:00～18:00

「山形の仏像調査」長坂一郎

地域文化遺産と保存修復

文化財保存修復研究センター 10年の取り組み

2012年10月25日(木) - 11月7日(水)

東北芸術工科大学図書館スタジオ 144(図書館2F)

入場無料

平日 9:00 - 20:00

土曜 9:00 - 17:00 日曜・祝日 休館

主催：東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター



図10-7 展示風景



図10-8 展示風景



図10-9 研究員によるトークショーの様子

(3) アンケート集計結果

今回の展覧会を通して行ったアンケート結果は、以下の通りである。本学学生を中心に来訪があり、展示内容についても好意的な意見が得られた。また、ギャラリートークも好評で、数多くの参加者を得られ、研究や修復の活動の実態を知る機会として重要な役割を持ったであろう。しかし、実物展示の要望が多く、PR不足による来訪者の少数であったことが問題点として挙げられ、今後の取り組みの参考にしたい。以下、アンケートの集計結果とそのご意見を掲載する。

回収枚数 計77枚

Q.1 該当するものに○をつけて下さい。また、年齢をお書き下さい。

性別	女性	男性	不明	小計 人数(%)
～20歳	33	7		40
21～30歳	21	3	1	25
31～40歳	2	1		3
41～50歳	1	1		2
60～70歳	1	1		2
70～80歳		1		1
不明	2	2		4
小計 人数(%)	60(78)	16(21)	1(1)	77(100)

Q.2 該当するものに○をつけて下さい。

1. 一般	2. 本学学生	3. 本学 教職員	4. 他大学 学生	5. 高校生	6. その他	合計 人数(%)
13(17)	59(77)	3(4)			2(2)	77(100)

Q.3 今回の展示について、いかがでしたか。該当するもの一つ○をつけて下さい。

1. とてもよい	2. よい	3. あまり よくない	4. よくない	合計 人数(%)
37(48)	38(49)	2(3)		77(100)

※3.4.と答えた方は、どのようなことなのかお書きください。

回答数2

- ・文字ばかりで少しつかれた
- ・2.ですが、垂れ幕だけでなく、実物（レプリカ）なども展示して欲しい

Q.4 今回の展示は何でお知りになりましたか。該当するものに○をつけて下さい。（複数回答あり）

1. 本学からの案内	2. 本学HP	3. 学内掲示	4. 市報	5. 新聞・テレビ	6. その他	合計
42	4	22		3	13	84

6.その他内約

- ・先生から
- ・友人から
- ・知人から
- ・研究員のみなさんから
- ・山形防災ネットからのメール
- ・授業
- ・所属していたゼミからのご案内
- ・講義
- ・山形大学での情報
- ・学生からの案内
- ・山形県立博物館のポスター
- ・不明×2

Q.5 今回の展覧会について、ご感想等ご自由にお書き下さい。

回答数52 ※内容次項参照

Q.6 今後、文化財保存修復研究センターに求めることがあれば、ご自由にお書き下さい。

回答数11 ※内容次項参照

「地域文化遺産と保存修復—文化財保存修復研究センター 10年の取り組み—」展 記述回答

Q.5 今回の展覧会について、ご感想等ご自由にお書き下さい。

・未指定文化財とその地域との歴史・関わりに目を向けた「地域文化遺産」という文化財の捉え方がなければ、日本全国の文化財はどんどんなくなってしまうのではないかと思います。本学で、この活動を継続的に行って行ってほしいです。とても良い展覧会でした。

・大江、高島など、行ったことのある場所も取り上げられていた。普段見落としてしまいそうな何気ないものが、地域の歴史・文化を語る貴重な遺産であることに気付かせていただきました。

・普段あまり知る機会の無いセンターの成り立ちや事業、今までやってきた活動についてなど、多くのことを知ることができてよかった。もっと大学全体、他学科の多くの学生に知ってほしいと思う展示だったので、もう少し宣伝できていればよかったと思う。

・センターの活動が詳しく分かりました。各分野の修復の様子も分かりやすくとても良かったです。

・トークショーがとても良かった。他学科の学生なので修復については素人だったので、実際に説明してもらえると分かりやすく、臨場感があった。

・以前、東京国立博物館で修復と保存の展示を見てから興味を持ち、今回トークイベントに来ました。始めて見る事、知ることが多く、面白かったです。実物が見てみたいです。

・トークイベントにも参加したかったのですが、授業との都合がつかず、行けなかったのが、残念でした。センターのことを知ってもらえる良い機会になったのではないのでしょうか。

・写真が多く、レイアウトなどもかっこよかった。10年間の間に本当に多岐にわたる調査・研究がされていたのだと改めて感じました。ただ一つ、実物がないのは残念。

・展覧会の前の告知にももう少し力を入れるべきだったのではないかと。センターが行っている研究や今回のようなギャラリートークなど、このような時こそ他学部や他学科の人に聞いてもらいたいと思う。

・研究活動内容は非常に質が高いと思います。しかし、視覚伝達デザインの質が低い、または（スタッフが）不在であるのが残念でした。最も大事な情報要素は言葉と図版で、それを引き立てる余白を十分に確保していればまだ見やすく内容が伝わり易いポスターになったと思います。

・阿形のX線透視図が面白かった。美術館で見た絵画や新海竹太郎一族、鶴岡の黒いマリアなどが修復されたのが見られてよかった。

・阿形のX線写真がすごい。もっとよく細部を見たい。

・山形で自分が勉強している意味を考えさせられました。もっと関心を持つようにしようと思いました。

・こんなに地域の文化財の保護に取り組んでいるなんて知らなかったのが勉強になった。

・本学には初めて来校しました。環境もよく学生さんも親切に案内して下さいました。

・苦勞の多い地道な活動でしょうが頑張ってください。

Q.6 今後、文化財保存修復研究センターに求めることがあれば、ご自由にお書き下さい。

・山形市内に或る旧家等建物の保存・修復にも力を入れて下さい。急速になくなっていく気がします。非常に残念に思っています。

・未指定文化財や、一般家庭で古くから伝わる文化財など、人の目が向けられていないものにこれからも目を向けて活動して欲しいと思いました。

・こういった展示は、学内だけでなく、学外にも持ち出して、一定期間公開してみるべきでは？全国に広く知ってもらう必要があると思います。特に一般の方々に。可能であれば少しでも関わりのある学術分野で、連携できる大学などにも持ちかけて展示や研究を行うと幅が広がると思います。

・今後もこのような活動状況を発信する機会をたくさん設けて頂きたいです。

・このまま、いろんなものを守っていて下さい。

4. まとめと今後の展望

シンポジウムや展覧会を通して、多くの人に本研究活動について知っていただき、理解と賛同を得ることができた。シンポジウムや講演、展覧会においては、講演やパネル展示に加え、パネルディスカッションやトークショーを行い、参加者である地域住民の方々と直接対話する時間を積極的につくったことで、相互の考えを共有することができたと同時に、研究成果を把握した上での住民側の意見や要望などを得られたことに、今後の研究に役立つ成果を得ることが出来た。しかし一方で、本学で行った展覧会では、学外への周知も積極的に行ったものの、来場者は学内の学生や職員に偏りがちで、地域住民の参加が少なかったことも事実である。本研究活動を進めていく上で地域との連携は大前提であり、今後より多くの地域住民の理解を得、強固な相互協力体制を構築していく必要がある。

したがってより地域との結びつきを重視した、一步踏み込んだ教育普及活動を行うために来年度以降は、たとえば現地での展覧会の開催や、本研究活動で判明した調査対象地域の地域文化遺産をめぐるガイドツアーなど、地域住民とともに歩み、身近に対話が出来るような報告会を実施したい。また、同時に本研究活動の内容を海外へも発信すべく、東アジア文化遺産保存国際シンポジウム（2013年9月開催予定）などの海外で開催される学会やシンポジウムでも積極的に発表していきたい。（大場）

テーマ2 小結

米村祥央

今年度のテーマ2は各研究項目で大きな進展があり、今後の活動においても研究の礎となる成果が得られた。研究テーマである、『環境に配慮し、安全で簡便な地域文化遺産保存管理を地域住民と展開するための基礎研究と教育普及』に沿い、地域文化財を地域で守るために住民の参加を意識し、人的にもコスト的にも過度な負担がない活動を試みてきた。概要でも述べたように、今年度は文化遺産を所有する施設をその収蔵環境に応じて3段階のレベルに分類した。それぞれのレベルに特有な問題点に対して有効かつ実施可能な対策を検討し、実践できたものと考えているが、継続的な活動とするためにはまだまだ大きな課題が残っている。以下に各研究項目のまとめを記載した。

保存環境調査に関する研究

保存環境調査に関する研究は、高島町の大聖寺(亀岡文殊)をモデルケースと設定して重点的に活動した。亀岡文殊の環境調査では、冬季の低温高湿という日本海性気候の環境であることがわかり、宝物館、本坊、護摩堂における温湿度変動の差についても明らかになった。また、入口や開放部など、有害生物の侵入口等も含めて総合的な環境特性が明らかとなり、すでに問題となっていた生物被害に対して具体的な改善策を実施することができた。

展示台下の窓への網戸や宝物館入口シャッター下部へ隙間テープを設置したことにより、それらを通過することができない大きさの昆虫、ムカデなど節足動物の数を減少させることができた。また、夏季に予期せぬチャタテムシの発生があったが、それによって昼間の室内の暗さなど、宝物館に特有の環境について、理解が深まった。

上記の網戸は、大聖寺の職員によって設置していただき、現地の方の参加という目的に対しても一定の成果が得られた。今年度の改善は本学の学生が精力的に活動したため、教育的な効果も得られた。今後はこの改善が継続的に実施されるよう、簡易的にシステム化することと、周囲の住民や若い世代の参加などを検討していきたい。

地域文化遺産保護の実践に関する研究

明治10年代に建立された白鷹町塩田行屋は、四代目智妙海が去った昭和5年頃を最後に、その宗教的な活動を停止している。以前は大日堂と修験者の庫裏があったが、現在は本堂と土蔵(大師堂)のみが残っている。施設は管理者らによって毎年2回、清掃されてきた。しかし宗教的な遠慮から須弥壇上は清掃されておらず仏像の部材脱落や小動物による被害、虫害が顕著であった。

文化遺産調査および撮影時に須弥壇を清掃した。後日、大規模な清掃活動を実践し、本堂須弥壇の汚損原因である、天井裏に堆積していた小動物の糞や木片を除去した。さらに土蔵や本堂の内部および堂宇の周辺も含めて改善することができた。この清掃では、塩田行屋の管理者らと共にその子息である若い方々も参加し、参道も自発的に整備していただいた。これらの自発的活動は、本保護活動において特筆すべき成果である。

本堂に安置された仏像の多くは部材が脱落している状態であり、仏像の宗教的意義、芸術的、資料的意義においても深刻な損傷であった。これらの仏像は将来本格的な修復が必要であるため、再溶解性のある接着剤を用いて脱落していた部材の接着と剥離が著しい表面塗膜の再接着を実施した。また白鷹町で開催された塩田行屋に関する2回の特別展開において研究成果を報告した。

特産素材からみた地域文化力の向上に関する研究

紙漉き技術と実情について県内外で調査し、青苧紙を試作した。各地の楮紙や、古代の製紙法と、試作した青苧紙を改めて比較したことで、原料による製法の違いや現代の手漉き和紙の製法を見直すこともできた。苧麻は繊維が長く、表皮を削いで繊維を採取する作業も困難であり製紙も難しい。そのため楮に対する青苧の比率を減らすことで製紙しやすいことが明らかとなり、青苧復活夢見隊と三浦一之氏の協力により廃校となる大江町本郷小学校の賞状を作成した。本研究は、青苧を画用紙として活用し、創作活動を通して地元にある多くの文化遺産を再評価することを目的としている。当面は青苧紙の筋道をつける事を目標として繊維

採集を改善し、紙漉き道具も検討したい。さらに紙漉き講習会を開き、教育普及にも力を入れる予定である。

教育普及活動の実践

平成24年度は、研究成果報告会1回、シンポジウム・現地報告会5回、展覧会と検討会、講演会を各1回開催した。シンポジウムや展覧会を通して、多くの人に本研究活動について、理解と賛同を得ることができた。シンポジウムや講演、展覧会においては、パネルディスカッションやトークショーを通して参加者と直接対話する時間を積極的に設定した。これによって相互の考えを共有することもできた。その一方、本学で行った展覧会では、地域住民の来場が少なかったことも事実である。本研究活動を進めていく上で地域との連携は大前提であり、今後より多くの地域住民の理解を得、強固な相互協力体制を構築していく必要がある。したがって、より地域との結びつきを重視した、一歩踏み込んだ教育普及活動を行うために、来年度以降、現地での展覧会、本研究活動で明らかになった地域文化遺産をめぐるガイドツアーなど、地域住民とともに歩み、身近に対話が出来る機会を計画したい。

本研究成果は学術的に発信することも重要である。平成25年度は、文化財保存修復学会（2013年7月、東北大学）、東アジア文化遺産保存国際シンポジウム（2013年9月、韓国慶州）などの学会やシンポジウムでも積極的に発表する予定である。外部研究者との協議を通して更なる研究の発展につなげたい。

平成24年度研究調査報告会

はじめに

本センターでは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受け、「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」(平成22年度～平成26年度)を実践している。研究事業の3年目となる本年度は、研究プロジェクトの中間年度であるため、これまでの調査研究活動をまとめた中間報告として位置付け、研究キーワードに沿って地域文化遺産の再評価・再発見とそれらの保護活動の成果を発表した。

本報告会は各町における調査・研究の成果について各内部研究者から報告し、外部研究者、各町の関係諸氏、または学内・学外評価委員からの意見や講評、客観的評価を受けるとともに、今後の研究事業の展開に向けて議論を深めることを目的に行われた。

主 催：東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター
開催日時：2013年3月2日(土) 9時30分～17時00分
開催場所：東北芸術工科大学 本館2階 207講義室

学内評価委員

・入間田宣夫(東北芸術工科大学教授)

学外評価委員

・三浦定俊(公益財団法人文化財虫害研究所理事長、文化財保存修復学会会長)
・佐藤庄一(山形考古学会副会長)

報告会プログラム

司会進行：センター長
開会挨拶(長坂)
1. 研究概要(岡田)

第1部 テーマ1

2. テーマ1研究概要
3. 山形における地域文化遺産としての近代洋画
—高橋源吉を中心に(大場)
4. 当該地域における近世近代の彫刻活動の展開
(岡田)
5. 地域に所在する絵馬と応急処置による再評価
(大山)
6. 高島石の外構利用とその集落景観
(北野・長田)
7. 米沢市戸塚山175号墳の発掘調査(北野)

第2部 テーマ2

8. テーマ2研究概要(米村)
9. 保存環境調査に関する研究(米村)
10. 地域文化遺産保護活動の実践(岡田)
11. 青苧と和紙からみた地域文化力の向上
(大山)
12. 教育普及活動について(大場)

第3部 来年度の展望と総評

13. 来年度に向けての展望
14. 総評

閉会の挨拶(長坂)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」 平成二十四年度研究調査報告会

2013年3月2日(土)
9:30～17:00 開場 9:00
東北芸術工科大学
本館2階 207講義室
TEL 023-627-2204
参加費 無料



地域文化遺産を未来へ

東北
文化
遺産
センター

質疑応答記録

1. 研究概要 (岡田 靖)

本研究事業に関する研究目的及びその意義、研究方法、研究体制などについて概要の説明を行った。

2. テーマ1 研究概要 (岡田 靖)

研究テーマ1「保存修復活動から展開される地域文化遺産の再発見と新たな価値の創出」に関する研究目的及び意義、研究方法、研究体制などについて概説した。

質問者：入間田宣夫学内評価委員

「二点質問がある。“為政者に着目した文化遺産の研究”で、大江氏が室町時代からは江戸時代という話しであったが、我々文献史学の方では戦国時代くらいは中世であるが、意図的にそうされているのか。もう一点、地蔵・観音・閻魔・庚申信仰は没者供養と直接関係はないのではないかと。特に閻魔と庚申は関係がなく、地蔵と観音は関わりがあるが、現世利益も含まれている。この両者をまとめた真意は何か。」

回答者：岡田講師

「一つ目の大江氏に関して、確かに最後の18代が戦国時代末期に最上義光に滅ぼされるが、末裔の方々が西川町に継続して命脈が保たれており、その後の遺産も含めて対象としているので、江戸時代まで含むということで近世とした。二つ目の信仰の確立も、もちろん没者供養だけではなくと承知している。」

司会：長坂センター長

「継続して来年度研究の方法・方向の練り直しを絶えずやっている。テーマ1は(1)地域文化遺産の概念規定と調査、(2)新たな文化遺産の価値の創出とした。(1)は具体的な調査内容を6つ挙げた。この中で“文化遺産の形状・寸法・構造・制作年代などの基本調査と写真撮影による記録”と簡単に書いているが、例えば私が専門とする美術史と修復の分野の基礎調査は異なる。損傷状況の調査は美術史や歴史学ではそう重要視しないが、修復・保存科学の観点で見ると傷み具合から歴史性が分かるというように、一つの見方だけではなく多方面からの調査をここでのやり方と考えている。問題は損傷からの観点と、(2)新たな文化遺産価値の創出がすんなり繋がっているかどうか。キーワードを作り、制作者・為政者・出羽三山等と分けて文化遺産の価値を新たに考えていこうと分類したが、それが果たして妥当かどうか。これについて先生方にご意見をいただきたい。」

回答者：入間田評価委員

「この一年間研究が非常に深まり、調査からさらに地域の個性の把握ができ、キーワードに沿って素晴らしい前進があったことを高く評価するとともに大変勉強になった。これが今年一番の成果ではないか。これから具体的な報告がされると思いますので最後に申し上げたい。」

回答者：佐藤庄一学外評価委員

「あるところに仏像があると。まず、どのような仏像であるか、その制作年代を知りたい。次に、元の安置場所と仏像の役割について知りたい。実はその仏像は所有者が持ち出しにくい程痛んでいる。このような仏像を後世に残していくためには、年代などの鑑定・背景・保存修復というものが三位一体となる。東北芸術工科大学の場合は文化財保存修復研究センターがあり、他ではあまりできない保存修復ができる。この3つをかみ合わせることで、あるいは多角的に見ていくことは良いことだと思う。キーワードにはそれなりに意味があって分かり易い。絵馬については一つの素材でもあり、出羽三山信仰に関係する絵馬もあり、お互いが独立するのではなくいろんな形で連携する場合もあるだろう。キーワードとして括ってみるといいのではないかと。」

回答者：三浦定俊学外評価委員

「最初に文化財保護法論が個別であることが話され、今回の場合は相対として見たいという話だった。それが正しいと考えている。テーマ1は作品の状態や寸法がどうであるか、個別に物を見ていたが、直接相対の話には繋がらない。テーマ1の部分は個別に地道に積み重ねること、テーマ2はその中から見えてくるものをどう解きほぐすかがキーワードではないか。これをどう具体化して平成24年度の研究を進めたか、これから報告を聞いていきたい。少なくともキーワードを立てたことは結構なことであり、キーワードの立て方は今伺った範囲では大変適切な面白いものだと思う。」

司会：長坂センター長

「どうもありがとうございます。これから個別研究の報告をさせていただきます。」

3. 山形における地域文化遺産としての近代洋画 —高橋源吉を中心に(大場詩野子)

山形県内に残る高橋源吉の描いた10点の油彩画について紹介し、それらを対象とした研究活動について報告した。これらの作品には、源吉が1911年

に山寺で行った展覧会の出品作が含まれていること、木枠の構造が特徴的で作品同定の根拠となること、油彩画技法に明治前期に活躍した旧派と同様の手法が見られることなどを報告した。

質問者：入間田評価委員

「大部分が風景画であるが『楠木正行如意輪堂に和歌を題するの図』は吉野の風景であり、他とは違っている。この描き方等々も基本的には山形時代の風景画と共通するのか。それから放浪生活を送る中で、当時人気だった楠木正成や楠木正行のような歴史ロマンのような作風の絵は他にもあるのか。」

回答者：大場研究員

「『楠木正行如意輪堂に和歌を題するの図』が風景画と同じように後ろから手前へ描かれているかは詳しく調査をしていないが、おそらくこのような描き方であると予測している。父の高橋由一が同じ構図で描いており、それを模写した作品だと思う。高橋由一の作品と比較すると色彩が異なり、源吉の方はかなり鮮やかで、青をきれいに塗る点や、楠木正行の鎧もたいへん鮮やかに描いている点などの違いがある。当時の新聞の山寺で行われた展覧会の記事の中にこの題名が出てくるが、何故これを描いたのかははっきりとはわからない。こういった歴史ロマンを感じさせるような作品を他に描いているかという点とあまりないと思う。ただ風景画以外は明治天皇の結婚25周年の式典というものがあり、町中で催し物や飾り物でお祝いをしている風景を油彩画とスケッチで何枚も描いている。油彩画は東京の三の丸所蔵館、スケッチは世田谷美術館に所蔵されている。」

質問者：入間田評価委員

「放浪となるとパトロンがついて、パトロンの好みに合わせた結果風景画が多くなったのか、展覧会を行って客が来るのを待つのかでずいぶん違うと思うが、主に風景画が多くなった原因はパトロンの意向なのか、もう少し内発的なことなのか。」



回答者：大場

「今まで調べた印象では、パトロンの注文によって描き、山寺の名勝地もパトロンに教えてもらったのではないかと推測している。当時の新聞を読むと源吉は初めに山形市に滞在し山寺に移ったとある。山寺で油絵の展覧会を行うが、その時に村長が手厚く迎えて色々世話をしたようだ。そのような人たちの手引きにより風景画が生み出されたと感じている。山寺の当時の社会状況は外部研究員の小林先生の協力も得て調べていく予定である。」

質問者：小林俊介 山形大学教授

「パトロンの件であるが、1908年に後の大正天皇の東宮時代の行啓が山寺にあった。その時、山寺行啓の実現に積極的に動いたのが当時の山寺の伊澤村長で、源吉の展覧会企画の面でもプロデュースしていた形跡がある。三島通庸の新道ができて二口橋の峠越えの街道が衰退したところを、もう1度山寺に活気を戻すため文化事業として行啓を実現させたり、展覧会を打って出たりしたのではないかと推測している。その一環として風景が描かれた。「天華岩」にも二口峠の山が描かれている。地域の文化的景観を再発見かつプロデュースして観光資源にしていこうという伊澤村長の戦略があったと推測し、今後の課題としていきたい。」



4. 当該地域における近世近代の彫刻活動の展開 (岡田 靖)

研究対象地域を中心とした山形地域において、まず七条仏師の山形県での活動の可能性を述べ、その影響と関係性について大江町左沢で江戸後期から明治期にかけて4代にわたって活動した林家仏師の現存作例の調査によって確認された見解を踏まえて報告し、さらに林家仏師に師事したとされる新海宗松(宗慶)・竹太郎と親子の造仏活動との関連性について、山形の歴史・文化的背景を交えながら報告した。

質問者：入間田評価委員

「地域に潜在する文化的な流れをもの見事に明らかにされて非常に感動的で画期的な成果である。一つ室町期に七条仏師が地方に移ってきた点が気になった。移った理由として京都が戦乱で住みづらくなったからという理由は非常に消極的な物言いである。室町期には全国的に各地域で彫刻家だけでなく法律家や芸事の師匠など様々な人を京都から招いている。その時の地域側の中心は大名であるが、この場合では大江氏が多分絡んでいる。それ以前の鎌倉期の場合には仏師が京都に行ったりするが、戦国期になると各地域にそれだけの権力が身につく、逆に京都側から地方に招来することが出発点になる。その権力が江戸期まで伝わっており、以前から連続と続いている側面もあるが地域の文化力が飛躍的に強まるのは室町後期からとみられる。そのようなことを詳しく調査するともう少し研究の趣旨に合うのではないか。」

回答者：岡田

「モノからみるというところでしかまだ探求できていない部分である。大江氏に関して七条仏師が山形に来たということ突き止めるためには歴史的な側面、また文献学的な側面から立証していくしかないと思うので、またいろいろとご指導をいただきたい。」

質問者：小林教授

「感想になるが竹太郎の初期の業績が明らかになり非常に勉強になった。」

5. 地域に所在する絵馬と応急処置による再評価 (大山龍頭)

これまでの絵馬調査から、地域の文化遺産の資料としての絵馬の重要性を取り上げ、損傷が進んでいる状態の改善策として応急処置を通じて、絵馬の展示空間を再評価する活動を報告した。

質問者：半田正博教授

「現場で最低限の処置を行うだけでも非常に改善された実感している。もう少し丁寧にやりたいが、膨大な量なので時間との戦いという部分がある。調査の日数を増やし、手当てもより丁寧にできればより良いと思う。」

6. 高島石の外構利用とその集落景観 (北野博司・長田城治)

二井宿街道沿い集落の高島石の利用に関する悉皆調査に基づき、その実態と特徴的な町並み景観の歴史の変遷について発表した。各時代で高島石を建物や外構、生業に積極的に利用し、その後も資源・財

として持続的に継承してきたことで、石材集積度の高い町並みが形成された。

質問者：佐藤評価委員

「高島石は主に地域内で外構工事などに利用されたという話であったが、橋脚の施設や道路、水路、神社の石段という大掛かりで大量消費という形で使われることはなかったか。」

回答者：長田ポスト・ドクター

「大量に消費した事例として、建物では旧高島駅舎が挙げられる。その他、昭和40年代から50年代には護岸工事に多く利用され、明治期では幸橋など石造の橋に使われている。この石橋などは、取り壊した際住民の方が総出で石を取りに行くことがあったとされ、高島石が貴重なものとして捉えられていたことが伺える。」

回答者：北野准教授

「佐藤先生も関係している歴史公園の整備が昭和60年代に入った時に行われた。その時敷石が大量に必要なだったので、二井宿街道沿いの石積みサイロを一斉に壊して、スライスして敷石に使ったということが聞き取りにより判明した。現在石積みサイロの数が減っている理由の一つがそれである。それにしても再利用されているので、資源の持続的な利用という意味ではこの地域は評価できる。」

質問者：井田秀和 高島町教育委員会

「先ほどの報告でも指摘していたが、安久津の石材記念碑の説明板設置については、教育委員会の方で鋭意進めている。デザイン等いろいろご相談をしながら進めて参りたい。」

7. 米沢市戸塚山175号墳の発掘調査 (北野博司)

米沢市教委と連携して進めている戸塚山古墳群の確認調査。175号墳では横穴式石室入口に石敷きテラスが検出され、前庭部では初葬、追葬に伴う祭祀土器が検出された。石室は群中最大規模で、その構造は現地産出の石材の特徴と深く関わっていることが分かった。

質問者：佐藤評価委員

「平成10年からの3年間東北芸術工科大学の学生の方と北野先生はご苦労様でした。戸塚山古墳と高島の古墳の比較により地域の石材の特殊性、古墳の形態がだいぶ分かってきた。こういうのはなかなか行政調査だけではできないものもあると思う。米沢市が戸塚山古墳について国指定史跡の指定に向けて頑張っているが、この成果は大きな支援になったと思う。」

8. テーマ2研究概要（米村祥央）

地域文化遺産を地域住民の手で後世に伝えるための研究である。簡便で無理がなく、安全かつ入手しやすい物品を使って保存環境を改善する方法を検討している。今年度は現状の保存環境に応じて3つのレベル分けをした。環境改善の実践、保護活動、素材に関する研究、教育普及が主な活動内容である。

司会：長坂

「テーマ2の研究概要の説明がなされた。考え方は昨年度と変わらないが今年度はテーマ1においてキーワードに分けて考えたのと同じように、レベルを3つに分けて研究方法を考えた。その結果実践方法として4つ取り上げた。ご意見、ご質問をお伺いしたい。」

質問者：入間田評価委員

「レベル3までに挙げたもの以外にも民家の倉庫、蔵、物置、押入れにもお宝があると思うがそのようなものもレベル3と含めるのか。」



回答者：米村准教授

「レベル2の方は人の出入りがある所、例えばすぐ隣に人が住んでいるところといったことも考えているため、どちらかといえばレベル2に含む。」

質問者：入間田評価委員

「個人の家の物置等はお寺の本堂とは異なる環境だと思う。もう一つレベル4くらいまで考えていたほうがいいのかも知れない。」

回答者：米村

「来年度に検討したい。」

9. 保存環境調査に関する研究（米村祥央）

大聖寺の環境改善と、その効果を検証するための調査を並行して実施した。データの解析から宝物館への有害生物防除には一定の成果が得られたと考え

ている。管理者の協力を得られたことも大きい。ただしチャタテムシが大量発生した問題があり、検討を要する。来年度はさらに条件が厳しい地での活動を検討しており、今年度の成果を応用していきたい。

質問者：三浦評価委員

「宝物館の床は絨毯か。」

回答者：米村

「絨毯ではなく、正方形のタイル状のもの。」

質問者：三浦評価委員

「チャタテムシが大量発生した件であるが、側壁の方で結露はみられなかったか。」

回答者：米村

「展示物の軸物に1度濡れたことが予測されるしわがある。」



質問者：三浦評価委員

「窓があると温度差でどこかに結露してそれにカビが発生しチャタテムシが出るという事があるのでおそらくそのようなことだと思う。物に出たというよりも建物の方に結露してそこに出たのだと思う。それからレベルを分けて考えるというのは大事なことであり、チャタテムシが沢山出たのと他の虫とを一括にすると評価できないので、チャタテムシを除いてトラップ1個当たり何匹虫を捕獲したかで評価するのはよくやるやり方。その整理の仕方でも虫の数が減ったということはシールや網を取り付けたことによる効果大きい。同時に行っている防虫剤の効果はすぐには分からないと思うが、1年だけではなくもう少し長く調査を続けると全体の評価がはっきりわかってくると思う。レベル3、あるいはレベル2の寺のような開放的なものでは網をつけるというやり方はできないので、どのように守っていくかというところが非常に大きな問題になると思う。是非これから先も考えて欲しい。」

回答者：米村

「宝物館は開放場所が明らかに決まっていたのでそこを狙えばいいというのがあったが、開放場所が多い寺は問題が多いと考えている。」

10. 地域文化遺産保護活動の実践（岡田 靖）

テーマ1における調査活動によって確認された白鷹町塩田行屋の新海宗松・竹太郎親子の制作による仏像文化遺産を、現状での文化財保護行政や管理体制など問題点や保存環境および現状の損傷状態などを鑑みて、その対策として現場で出来得る清掃活動や応急的修復処置の実践による地域文化遺産保護活動について報告した。また、白鷹町文化交流センター主催の当該文化遺産の展覧会への協力や町内のまつりイベントでの特別開帳の企画などを通じ、文化遺産やその保護活動の意義について喧伝した一連の活動について報告した。

質問者：三浦評価委員

「塩田行屋のお話しは大変しっかり取り組んでいる。清掃活動の後も展覧会をやってその成果を出すのは非常にいい。負のスパイラルという事柄に迫ると、塩田行屋の一つやっただけでどうにかなる話しではない。これから先どのようにプロジェクトの中で進めるのか、あるいは他の場所、同じような場所を選んで少しまた違うモデルケースとしてやるのか。これからの取り組みをどう考えているか。」

回答者：岡田

「塩田行屋と同様の状況は研究対象としている大江町、高島町、西川町を含むどこにでも生じている。町の方とも検討し、事例を増やしていかないとこの活動自体が知られないと思う。塩田行屋は初段階の事例という形で今後も継続してなるべく多くの活動をしていきたい。そのために我々研究員だけでは難しいので文化財ネットワークというものを形成して卒業生を交えながら展開していきたい。」

質問者：三浦評価委員

「なぜ塩田行屋をモデルケースとして取り上げたかを明確にした方が良い。面識や依頼があったなどという状況もあるだろうが、これから先一つのケースとなって、このようなやり方をすれば所有者の方達ができる。また、方法を提示してこれを選択するという視点も必要だと思う。同じような事例だけでは参考にならないため、異なる特色を持った事例を取り上げ、それを選んだ理由が分かる形で進めてもらいたい。」

回答者：岡田

「まだ言える段階ではないかもしれないが最終的な目標としては、このようなモデルケースを増やして認知を高めた後に、本学学生らが卒業したあとの活動の場にしたいと考えている。それは、本学の卒業生が卒業後になかなか修復を生業とするだけでは生活を成り立たせるのが難しい現状にあるためである。このような現場での保護活動といったものが仕事となるよう、保護活動の喧伝と理解を深めていけたらと考えている。」

11. 青苧と和紙からみた地域文化力の向上（大山龍頭）

大江町の特産素材である青苧と、西川町の特産である和紙の技術を融合させることで、地域文化力の向上につなげる研究。楮紙の製法と麻紙の製法の折衷案から、現座の活動との関係を見出し、次年度に向けた方針の提案を行なった。

質問者：半田

「試行錯誤を繰り返して成果が上がりつつある。所謂苧紙とは別物と感ずるものなので、風合いの変わった手漉き和紙がうまく完成し芸工大の日本画の学生に使ってもらえるようなものになると素晴らしい。偶然レチングがされた件では3ヶ月であれだけ白くなることに驚いた。本当はソーダ灰なんかが効果があると思った。最近の紙漉きでは一切やらないが、平安末期や鎌倉期の頃の紙を調べるとレチングされている紙も結構あり、かなり効果があると思う。中国だと石灰でレチングするので石灰も試してみてもどうか。」

質問者：柏倉清助氏 青苧特産品づくり支援隊代表

「大山先生の発表をたいへん感動しながら聞いておりました。私大江町の青苧復活夢見隊の隊長である柏倉でございます。私も高齢になり83歳になるわけですが先生の研究結果の発表を聞いたことにより高齢にも関わらずもう1年2年、先生の研究に心よりご支援申し上げ、感謝の言葉に代えたいと思います。一緒に頑張りましょう。」



12. 教育普及活動について（大場詩野子）

研究活動の内容および成果を学内外に周知することで相互の協力体制を築くことを目的に、報告会、シンポジウム・展示会を開催した。このうち、大江町・西川町・高島町の三町で開催したシンポジウムと、東北芸術工科大学で行った展覧会について、その詳細を報告した。

（質問等なし）

13. 来年度の展望と総評

司会：長坂

「これからは最後の総評ということで評価委員の先生方からご講評いただきたい。よろしく願いいたします。」

三浦定俊学外評価委員

「当初は地域文化力、地域文化遺産とは何かというのが見えなかったが、地域文化力とは何かということがきちんと定義されたことにより何をどうやるかが明確になってきたようだ。テーマ1、テーマ2に分けて、テーマ1では地域の文化の価値を見つけるというのが中心だった。これを保存に繋げていくという形で、今回たいへんよくまとまっていたのは岡田さんの仏師の話だった。山形に幕末から明治にかけて何人かの仏師の家系があり、実際に仏像がいくつも残されていて、かつ一番それが残されている場所としての塩田行屋での保存に繋がっていくというのがたいへん分かり易い。スライドを拝見しても整理前の状態で仏像が大切なものと言っても伝わりにくいだろうが、研究をバックにしてきちんとご説明して地元の方に分かっていたいただき、かつ保存・保護活動を行った。これによって地元の方たちも動き出してくるという一つのモデルを見せていただいた。このような方法で残りの3年間やっていただけたらいいと思う。高島石の話も感心した。地道な調査をずっと続けていって、記念碑の解説板を造るといのはたいへん分かり易いし、そのような形で研究の成果がごく短い文章になるのでしょうか地元で生きてくるのも良い。そういう意味で5年間の研究が3年目で一つの姿を見せてくるようになったと思う。そのほかのものを含めて一層、それぞれのご発表の中でこうやりたいという話があったのでそれを進めていただければと思う。」

佐藤庄一学外評価委員

「昨年発表時間のことについて私の方でお願いしたところは、長丁場だったが時間通りに終わり良かった。発表内容について3つの点を申し上げたい。第一に、こういった報告が個別でなく物語であって

欲しいと初年度に申し上げた。3回目としてだいぶ物語にテーマが出来上がってきたのだなと感心した。今後の検討ということで申し上げれば、出羽三山信仰に関する様々なものが組み合わせり物語になりつつあると思うが、その場合に出羽三山信仰を、西川町を通して全体をひと括りにするのではなく、西川町には西川町としての出羽三山信仰の特色があるのではないかと。寒河江の宇井先生の研究によれば西川町に来る人は米沢、会津といった東南北部、関東地方からの人が多いということであるとか、あるいは出羽三山の進化の形態の通路であれば最初庄内川を回ってずっと羽黒山、月山、湯殿山ときて最後に西川町に来るというルートも多いということも聞いている。宿坊について岩根沢を調べられたということであったが、同じような宿坊は本道寺の方にもあると思う。宿坊には定宿のようなものがあり、ここの講の人は参拝に来ればここに泊まる。このようなものが代々受け継がれているということもあるようなので、出羽三山信仰の中のさらに西川町のを調べられるといいと思う。

二つ目は大江町の文化遺産についてであるが、大江町は昨年11月に国の文化審議会から“最上川の流通・往来及び左沢町場の景観”について山形県で初めて文化的景観の選定を受けた。この選定のために東北芸術工科大学のオープンリサーチ事業が大きな役割を果たしたのではないかと。私も大江町では左沢楯山城の発掘調査を2年ほど手伝っているが、そういう中で来てくださる方が大江町のそれぞれの文化遺産に少しずつ関心を持ってきているのだということが実感として分かり嬉しく思っている。最後に、地域文化遺産の保護運動ということで、例えば塩田行屋のようなもの、あるいは西川町の様々なもので、徐々に寂れていく信仰関係の建物に対していくつかの方法でそれを復活する、守っていく手立てというのを話していただけた。その場だけでなく山形県全体について信仰の拠り所となっている場所、建物等をどう守るかという問題だと思う。こういう面で一つ大きな試みということを仰っていただいた。私なりに考えるとぜひ今回の事業を契機にして各市町村の中で地域の文化遺産を再発見する、地域の宝を守るものになんとか運動の輪が繋がってほしいと思っている。充実した発表であった。」

司会：長坂

「ご指摘いただいた3点は来年度の活動の計画に取り入れたい。」

入間田宣夫学内評価委員

「今年は去年までの活動を踏まえて理論的にも実

実践的にも非常に深まったレベルに到達されたという印象を受けた。悉皆調査の話であるが、昔は地域における文化財を断片的にいいものだけつまみ食いし、極端な場合東京の方に持って行って博物館に陳列するだけのようなことを美術方面以外でも行っていた。最近は考古、歴史学の方でも地域の側に立って、そのものだけに光を当ててつまみ食いするのではなくトータルに議論するという風になりつつあるが、今回は美術分野でもそういう状況が確実に形づくられつつあるのを実感した。悉皆調査する際にも意義や方法をきちんと理論化し、文章の上でも明確にする必要があるが、今回は非常に意図してそういう方向での努力がなされた。これで美術方面での、地域における悉皆調査の意味を全国に、あるいは世界に発信できる基盤ができたのではと非常に力強く伺った。強いて言えば考古学や歴史学など他分野での地域を巡る研究成果との対話にもう少し力を入れるといい。地域というのは古来一貫しているのではなく、どうもだんだん出来上がってくるもので、特に日本の長い歴史でいうと室町半ばくらいから今日に繋がるような地域の色彩がだんだん強くなってきて、そして江戸時代、現在に至る。記憶のスパイラルというのがあり、地域自体が歴史とともに成長し中身が備わってきて、地域自体が動くものである。それに対して各方面の議論があるのでそれとうまく対話できる形で理論展開すると地域について一体的な捉え方ができる。そうなると美術分野での悉皆調査の理論も一歩さらに高度なものになるのではないかと。その線でこれから頑張っていただけるよう期待している。」

司会：長坂

「最初に指摘したとおり文化財保存修復研究センターでの調査理論があると思っており、それを今作りつつあるのではないかと感じている。それを他の歴史学・民俗学とどう特色を出していくのか、どのように捉えて新しい観点を出していかがある意味大きな成果になるのではないかと思う。地域が成立するという話しは、お隣の東北文化研究センターで集落の成立というテーマで行われている研究なども参考にしながら、視点をより高い次元に、広角の視点を取れるような理屈を考えていきたい。」

入間田宣夫学内評価委員

「地域があり、その中で文化力が備わっていくものもあるが、反対に様々な文化的活動の総体が地域を創る力になってきたと思う。地域というのが出発にあるのではなく、むしろ文化力を育む活動自体が地域を創る過程になる。実はどちらか一方でなくて両方が絡み合っていてできてくるということがうまく掴めればいい。」

司会：長坂

「どうもありがとうございました。昨年度先生方から厳しいお言葉をいただいたが、今年はお褒めの言葉をいただいた。これを踏まえ来年度の研究計画を補強し活動しますので、また御指導の方よろしくお願いたします。」



総括

長坂一郎

〈平成24年度の研究成果について〉

最後に本年度の研究活動のまとめとして研究方法とその意味および展望を述べて終わりとしたい。

研究「テーマ1」では平成22年度の報告書で「研究キーワード」を設定して研究の方向性を確認するという方法を取ることとし、その22年度の研究を踏まえさらに23年度ではその「キーワード」の見直しを行った。

概要説明でも挙げたが以下の通りである。

- A) 制作者に着目した文化遺産の研究
- B) 為政者に着目した文化遺産の研究
- C) 出羽三山信仰に関する文化遺産の研究
- D) 民間信仰に関する文化遺産の研究
- E) 生活文化に関する文化遺産の研究
- F) 文化遺産の素材に関する研究
- G) 遺跡文化遺産に関する研究
- H) 地域の自然資源に根ざした文化遺産の研究

また研究「テーマ2」では文化遺産を所有している施設を3つのレベルに分類して、研究対象とするという方法をとった。

レベル1 一所蔵品保管専用の施設を有するもの

レベル2 一檀家を持つ寺社仏閣

レベル3 一住民居居から離れた地にある施設（お堂等）

以上のように、「テーマ1」、「テーマ2」ともに、「キーワード」、「レベル分類」の方法を取り入れたことにより、研究の内容が判りやすくなり、かつ集約しやすくなったと思われる。それぞれのテーマに沿った研究の成果が本報告書の内容であるが、それぞれの研究報告は緻密であり、かつ先駆的なものであると自負している。

研究成果については「テーマ1」、「テーマ2」ともにそれぞれの「小結」で述べているのでそちらを参照していただきここでは繰り返さないが、本年度の研究方法についての考え方を少し述べてみたい。

本研究を始めて以来、繰り返し言及していることが「地域文化遺産」の多面的な把握と住民参加の保護活動である。本研究の第一の目的といてよいと思う。その根本は、現行の文化財行政の不備に対する「文化財」の現場からの発想である。いわく、「文化財指定制度の弊害」、「優品主義の弊害」、「単品主義の弊害」等多々いわれてきているが、「指定品」であろうと「優品」であろうと「単品」であろうと、「品物」には変わりはなく要は「評価」つまり「価値付け」の問題と思われる。

一方、「品物」に「価値付け」する場合を考えた時、様々な価値付けがなされるであろうことは容易に想像がつく。すなわち、個人の思い出から人類の記念品まで、どのような「価値」も付加できるであろう。では「品物」の「地域文化遺産」としての「価値」はなにか。例えば、ある地域の「文化遺産」はその地域に住む人間にとっては必ず「文化遺産」であるのか、例えば、ある地域の「地域文化遺産」とある地域の「地域文化遺産」は異なってよいのか、つまり「地域」が異なれば「地域文化遺産」は異なるのか、例えば、過去の時代の「地域文化遺産」と現在の「地域文化遺産」は異なってよいのか、等々。さらに様々な状況が想定できるであろう。しかし答えは「すべて正しい」と考える。なぜなら、「品物」をめぐる、言い換えれば、結果「品物」を生み出すことになった全ての人間の活動が、歴史であり、文化であるからである。したがって、「品物」については、個人、生産・制作、流通、信仰、素材、時代、等々の事象が存在したはずであり、それがその「地域」で行われていたのであればすべて「地域文化遺産」である。その「品物」のある一面だけを見てそれを「価値」とみることはやめよう、という見解である。「品物」をめぐる個人、生産・制作、流通、信仰、素材、時代、等々の事象、言葉を変えれば、ある「品物」についての「ストーリー」を紡ぐことが「文化遺産」の発見、再構築であり、その「ストーリー」の範囲が「地域」であれば「地域文化遺産」、大きくなれば「日本」の、さらに「国際」となるし、過去に遡れば「歴史文化遺産」ということになる。とすれば、「住民」はその「ストーリー」のどこかの部分で関わる可能性は高いし、各地域でそれぞれ各地の「ストーリー」が語られれば、その意味で各地は同等の価値付けが行われるということになる。

この「品物」についてのストーリーをどう紡ぐかが「キーワード」ということである。繰り返しになるが「品物」について行われた地域の活動を多方面、多段階からみていくための方法であり、「一面からの価値付け」とは決別しているものである。

「テーマ2」の対象個所の「レベル分け」も新たな観点からの方法である。近年「予防保存」の概念は定着してきているが、地域の現場での実践の実績はどれほど成果が見られるものであろうか。素朴な疑問をもたざるを得ない。本研究はその目的のはじめから、研究機関として現場に出て行って保存修復活動を行おう、という認識を持っている。その際、当然、先行研究や実践記録を参考にしたが、それでも結局、地域の現場での保存活動は画一的にはできないという、ごく当たり前のことを確認することになった。その中においての効率的な研究方法として、「トリアージ」法の援用を考えた。結果、今後の対策としての有効性が確認でき、また年度末の報告会においては評価委員からも講評で「レベル分け」の種類を増やしたほうがよい、とのアドバイスもいただいた。今後の重要な提案と考える。

以上、簡単に、本研究の方法についての意義を述べた。

研究は結果、結論を提示することだけが目的ではない。否、その方法論と論理性の提示こそが、他分野も含めて、科学的研究に貢献できるものとする。本研究はまさに文化財の修復、保存の分野で、文化財に対する新たな論理に基づいて、新たな方法論を見出し、現場で実践しているものである。この実験的な研究の結果が地域住民に受け入れられ、永続性を持つことで終了することを願うものであるが、それとともに他の研究機関、研究者諸氏に認識され、協力者、協力体制が構築できれば大きな喜びである。以上を希望的展望として稿を終わりたい。

文化財保存修復研究センターの概要

建物名称／文化財保存修復研究センター

建築規模／763.38㎡

延床面積／1階 752.10㎡

／2階 590.10㎡

／3階 716.15㎡

／4階 284.86㎡

／合計 2343.21㎡

最高高さ／18.95m

軒高さ／13.415m

構造／鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造

竣工／平成18年3月27日



■ 1階



①遺物処理室

真空凍結乾燥処理装置、PEG用恒温含浸処理槽等を使用し出土した木製埋蔵文化財や水害で被災した書籍の保存処理を行います。また金属製品の保存処



理や各種材料の光照射強制劣化試験や強度試験も行います。

②立体作品修復室-1

手術用実体顕微鏡、レーザ・クリーニング装置、歯科用精密グラインダーなども使用し、古代から近代の立体作品（石膏・石造・陶磁・モルタル等）や木造の仏教彫刻等の調査や修復を行います。



③歴史遺産研究室

県内遺跡の発掘調査のための前線基地であり、現在進行中の窯業遺跡から出土した土器類等の考古学研究等を行います。土器の形態や色彩、硬度等の計測も行います。



④ X線透過撮影室

デジタル（フラッドパネル）・アナログ共用透過X線撮影・TV観察装置、据置型大型資料用蛍光X線分析装置を使用し作品・資料の構造調査や材質分析を行います。



⑤文化財保存修復研究センター事務・図書室
研究員・事務員が常駐します。またセンター図書の収蔵・閲覧、会議室の機能ももっています。

■ 2階



⑥収蔵庫（防火金庫扉および風除室）

無機系脱酸・脱塩基性調湿内装材を壁材とし、温度・湿度管理の空調を完備しています。国や県市町村指定の文化財の保存修復のための一時的な保管に対応できるよう管理体制を整えました。収蔵庫内部では、作品の写真撮影や計測などを行なうとともに、物理的・化学的・生物学的な保存環境の実験的研究も実施します。



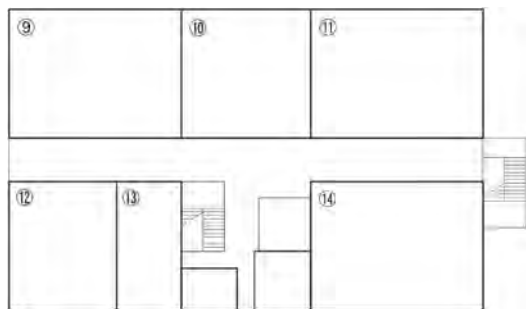
⑦教員研究室（7室）

教員5名および専任研究員1名の研究室です。

⑧院生研究室（1室）

外部の共同研究者やPD・RA、院生などの研究室です。ミーティング・テーブルを置き、研究成果のプレゼンテーションやディスカッションを行ないます。

■ 3階



⑨東洋絵画修復室

掛軸や屏風、古文書や典籍などの和紙や絹、鉱物性顔料や膠などの伝統的材料を用いて描かれた作品・資料の修復を行います。作品の性質上風を嫌うため、空調は秒速1m以下の「エアー・ソックス」を採用し、また大型の除湿機・加湿器を導入しています。



⑩機器分析室

X線回折分析装置、ガスクロマトグラフ質量分析装置、顕微フーリエ変換赤外分光分析装置、モバイル型蛍光X線分析装置、イオンクロマトグラフ装置、ガスクロマトグラフ装置、可視紫外分光光度計、三次元蛍光分光光度計、光学顕微鏡（実体・金属）、走査型電子顕微鏡などを使用し、作品の劣化状態や構造、材質等を分析します。



⑪保存科学研究室

文化財材質の調査や分析を実施する、いわゆる実験ラボです。恒温恒湿器2台と乾燥機、純水製造装置、化学天秤などがあり、さまざまな材質試験を実施します。



⑫立体作品修復室-2

立体作品修復室-1とともに、各種素材による資料の調査研究を行います。修復に用いる接着剤等からの有害気体を浄化・排気するシステムを導入しました。

⑬準備室

研究者の研究準備機能をもっています。また立体作品等用および遺跡・建造物用の非接触レーザ三次元計測器を用いて、文化財の精密測定を行ないます。計測データは、パソコンにより可視化し、またデジタルアーカイブを可能にします。

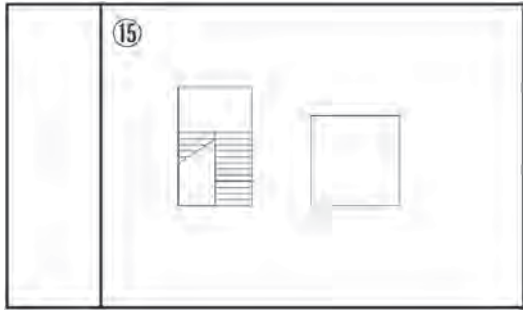


⑭西洋絵画修復室

油彩画を中心とした西洋絵画を対象とし、これらの制作材料や技法の研究、修復材料や技術の研究などを行ないます。



■ 4階



⑮展示室

文化財保存修復研究センターの研究に係るさまざまな企画展の開催、修復の過程や完了作品の展示、研究成果の公開等に使用します。



※1 遺物処理室および立体作品修復室-1は、大型資料に対応できるよう2階まで「吹き抜け」になっており、ホイストクレーンなどの重機を擁し、開口部の大きい搬入口トラックヤードが用意されています。

※2 本棟のエレベータは作品運搬用であり、大型の資料の移動を考慮しています。

※3 二重の窓ガラスや蛍光灯は紫外線を除去し資料の劣化を防ぐ対策が取られています。また壁材には珪藻土を使い、周囲雰囲気湿度安定化を図っています。

■研究設備・機器

基本設備

- ・収蔵庫（金庫扉、風除室、無機系脱酸・脱塩基性調湿内装材壁）（金剛）
- ・有害気体・粉塵排気システム（ダルトン）
- ・恒温恒湿試験室（ダルトン）

調査・分析用

- ・据置型大型資料用蛍光X線分析装置（リガク）
- ・モバイル型蛍光X線分析装置（米・イノベックス社）
- ・デジタル・アナログ共用透過X線撮影・TV観察装置（独・エクスロン社）
- ・可搬型X線撮影装置（独・エクスロン社）
- ・遺跡・建造物用レーザ三次元非接触計測装置（オーストリア・リーグル社）
- ・美術品・考古遺物用レーザ三次元非接触計測装置（コニカ・ミノルタ社）
- ・X線回折分析装置（独・ブルッカーエニックス社）
- ・ゲル・パーミエーション・クロマトグラフ装置（Waters社）
- ・手術用実体顕微鏡（ツァイツ社）
- ・手術用実体顕微鏡（ライカ社）
- ・実体顕微鏡（オリンパス）
- ・金属顕微鏡（オリンパス）
- ・EDX 附属走査型電子顕微鏡（日本電子）
- ・EDX 附属走査型電子顕微鏡（日立）
- ・イオンクロマトグラフ分析装置（日立）
- ・可視紫外分光光度計・大型積分球附属（日立）
- ・三次元蛍光分光光度計（日立）
- ・顕微装置附属フーリエ変換赤外分光光度計（パーキン・エルマー社）
- ・ガスクロマトグラフ質量分析装置（日本電子）
- ・ガスクロマトグラフ分析装置（日立）
- ・赤外反射画像観察装置（浜松フォトニクス）
- ・自在型照明器具
- ・デジタルマイクロスコープ（ハイロックス社）

修復技術・材料試験用

- ・YAG レーザ・クリーニング装置（仏・クオンテル社）
- ・PEG 用恒温含浸処理槽（6m 長、ダルトン）
- ・真空凍結乾燥処理装置（0.5m および 1.5m 長、宝製作所）2 台
- ・耐光試験用キセノン・フェードメータ（スガ試験機）
- ・金属遺物用クリーニング装置
- ・紙資料用オートグラフ（材料強度試験機）
- ・恒温恒湿試験器 2 台
- ・定温乾燥器 4 台

平成24年度活動一覧

1. 今年度（平成24年度）の調査研究活動

- (1) 5月15日 研究協議会（西川町、大江町） 岡田・大山・大場・長田
- (2) 5月20日 第8回高島まちあるき（高島町） 北野・長田
- (3) 5月24日 大笹生・沢福等石切り場調査、工藤家聞き取り調査（高島町） 長田
- (4) 5月24日 米沢・熊野神社仏像〔横山権六作〕調査（米沢市） 岡田
- (5) 5月25日 亀岡文殊環境調査（高島町） 米村・岡田・大山
- (6) 5月30日 大笹生地区工藤家石材利用調査（高島町） 長田
- (7) 6月12日 岩根沢・丸山薫石碑の墨入れ作業（西川町） 岡田
- (8) 6月15日 西川町・天井絵調査（西川町） 半田・大山・岡田
- (9) 6月17日 第9回高島まちあるき（高島町） 北野・長田
- (10) 6月19日 油彩画作品調査（山形市） 大場・小林（山形大学）
- (11) 6月22日 巨海院文書調査（大江町） 大山・岡田・大場・長田・松尾（山形大学）
- (12) 7月3日 獅子ヶ口諏訪神社絵馬・落書き調査（西川町） 大山・三上（山形大学）
- (13) 7月5日 第1回大笹生地区文書調査（高島町） 北野・長田
- (14) 7月5日 工藤家古文書・書画調査（高島町） 大山・長田
- (15) 7月7,8日 塩田行屋保存環境改善活動（白鷹町） 長坂・岡田・大山・大場・長田
- (16) 7月12日 株式会社天童タワー（天童市） 大場・森・小林（山形大学）
- (17) 7月13日 菊池写真館調査（大江町） 岡田・大山・大場・長田
- (18) 7月21日 高島まちあるき一石蔵実測調査（高島町） 長田
- (19) 7月22日 第10回高島まちあるき（高島町） 北野・長田
- (20) 8月6日 第2回巨海院文書調査（大江町） 大山
- (21) 8月6日～9月1日 戸塚山175号墳発掘調査（米沢市） 北野
- (22) 8月11日 松原貞好氏宅（山形市） 大場・小林（山形大学）
- (23) 8月21日 工藤家文書調査 書画作品調査（高島町） 大山
- (24) 8月22日 大笹生地区・工藤家文書調査（高島町） 岡田・大山・長田
- (25) 8月28日 亀岡文殊文書調査、燻蒸処置（高島町） 大山
- (26) 9月3～7日 第11回高島まちあるき 合宿（高島町） 北野・長田・鶴浦
- (27) 9月6日 松田家仏像調査（大江町） 岡田
- (28) 9月12日 調査下見（西川町） 大山
- (29) 9月18～19日 西川町岩根沢 三山神社・宿坊調査（西川町）
長坂・半田・米村・岡田・大山・大場・長田・鶴浦
- (30) 9月21日 高島まちあるき一石蔵実測調査（高島町） 長田
- (31) 9月25日 第3回巨海院古文書調査（大江町） 岡田・大山
- (32) 9月26日 小清地区民家調査（大江町） 長田
- (33) 9月28日 山寺、面白山周辺（山形市） 大場・小林（山形大学）
- (34) 9月29日 高島まちあるき一石蔵実測調査（高島町） 大場・長田
- (35) 9月28～29日 全国手漉き和紙青年の集い（西川町） 大山
- (36) 10月14日 第12回高島まちあるき（高島町） 北野・長田
- (37) 10月24日 戸塚山175号墳補足調査（米沢市） 北野
- (38) 11月1日 戸塚山古墳群現地説明会（米沢市） 北野
- (39) 11月3日 岩根沢宿坊調査〔阿弥陀堂仏像調査〕（西川町） 長坂・岡田・長田・永井
- (40) 11月18日 第13回高島まちあるき（高島町） 北野・長田・大山・永井
- (41) 11月20日 旧本道寺板図・扁額調査（西川町） 岡田・大山・大場・長田・永井
- (42) 11月25日 和紙文化研究会講演会参加（東京都） 大山
- (43) 11月28日 小清地区の民家聞き取り調査・黒森大日堂保存環境調査（大江町） 長田
- (44) 11月28～29日 和紙調査（高知県） 大山

- (45) 11月30日 大江町文化的景観シンポジウム参加（大江町） 岡田・大場・長田
- (46) 11月30日 装演師連盟定期研修会参加（京都府） 大山
- (47) 12月2日 第14回高島まちあるき（高島町） 北野・長田
- (48) 12月8日 楮蒸し会（西川町） 大山
- (49) 12月10日 巨海院文書調査（大江町） 大山・永井
- (50) 12月14日 伊澤家高橋源吉作品実測・聞き取り調査（山形市） 大場・長田
- (51) 12月15日 和紙文化研究会月例会参加（東京都） 大山
- (52) 12月21日 愛染院仏像調査（西川町） 長坂・岡田・長田・永井
- (53) 12月21日 昭和堂写真館高橋源吉作品調査（大石田町） 大場・小林（山形大学）
- (54) 1月12日 保存修復、材料調査 膠文化研究会（東京都） 大山
- (55) 1月18日 工藤家書画調査（高島町） 大山・長田・佐藤（山形大学）
- (56) 1月21, 22日 法来寺仏像調査（山形市） 長坂・岡田・長田・永井
- (57) 1月29日 西川町天井絵調査報告（西川町） 大山
- (58) 2月6日 麻紙の使用感調査（山形市） 大山
- (59) 2月20日 保存修復による文化交流調査（東京都） 大山
- (60) 3月13日 第15回高島まちあるき（高島町） 長田
- (61) 3月12日 旧西村写真館調査（山形市） 大場・長田
- (62) 3月26日 高島町立図書館古写真調査（高島町） 長田

2. 昨年度（平成23年度）の調査研究活動一覧

巨海院（大江町）	常林寺（寒河江市）
小清地区民家（大江町）	清龍寺（河北町）
西林寺（大江町）	塩田行屋（白鷹町）
黒森大日堂（大江町）	菊地写真館（大江町）
林家（大江町）	古写真調査（高島町）
旧本道寺（西川町）	小清地区の土地台帳調査（寒河江市）
獅子ヶ口諏訪神社（西川町）	高島町安久津地区の土地台帳調査（米沢市）
六十里街道および弓張茶屋跡実測調査（西川町）	戸塚山古墳群発掘調査（米沢市）
高島まちあるき（高島町）	月山和紙調査（西川町）
大聖寺（高島町）	白石和紙調査（宮城県）
王龍院（高島町）	青苧調査（西川町・福井県・福島県）
永源寺（寒河江市）	

3. 研究成果の公表など

(1) 論文・報告書

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター

『平成23年度 文化財保存修復研究センター研究成果報告書』 平成24年8月31日

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター

『平成24年度 東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター 紀要No.3』 平成25年3月31日

長坂一郎 「平安時代前期の神宮寺における薬師如来像造立について— 滋賀・大嶋神社奥津島神社蔵木造地藏薩立像再考—」

藤田まり子 森直義 「熊谷守一『牡丹』における析出物の分析と考察」

大場詩野子 「高橋源吉の油彩画に使用された制作材料・技法について— 山形市所蔵 高橋源吉作『宮城縣穴瀑の紅葉』『天華岩』『藤花滝』を対象に—」

岡田靖 宮本晶郎 「新海宗慶（宗松）および少年期の新海竹太郎の造形的特徴における新知見— 神仏分離に伴う古仏修理から得られた造形理解に関する考察—」

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター

『置賜地域の終末期古墳6―山形県米沢市戸塚山175号墳発掘調査報告書』平成25年3月31日

北野博司 「最上川流域の古墳とムラ」 『うきたむ考古第17号』 うきたむ考古学会 平成25年3月

(2) 学会発表

- 平成24年6月30日、7月1日 文化財保存修復学会第34回大会「展覧会およびその調査から展開する地域文化遺産の保護活動―山形県白鷹町塩田行屋の仏像文化財を事例として―」
ポスター発表（東京都）岡田・宮本（白鷹町文化交流センター）
- 平成24年9月11～14日 日本建築学会大会「山形県高島町における高島石の生産と集落景観」口頭発表（愛知県）長田
- 平成24年10月27日 平成24年度山形考古学会研究大会「東北芸術工科大学における埋蔵文化財の調査・研究・教育」口頭発表（山形市）北野

(3) シンポジウム・講演会

①外部主催

- 平成25年2月17日 2012山形の考古資料検討会「戸塚山175号墳の発掘調査」（高島町）北野
- 平成25年3月28日 高島町文化財保護会講演会「高島石の里まちあるき」（高島町）長田

②内部主催

- 平成24年4月17日 「高島石と安久津の歴史を語る」（高島町）北野・長田
- 平成24年4月21日 高島石の里まちあるきシンポジウム「高島石の歴史を紡ぐ―未来への活かし方を求めて」（高島町）北野・長田
- 平成24年8月5日 文化遺産シンポジウム「歴史の声を聞く―地域文化遺産の保護に向けて」報告会（西川町）米村・岡田・大山
- 平成24年10月25日～11月7日 「地域文化遺産と保存修復―文化財保存修復研究センター10年の取り組み」
展示（本学）長坂・藤原・半田・森・米村・岡田・大山・大場・長田
- 平成24年11月1日 「戸塚山175号墳発掘調査現地説明会」（米沢史）北野
- 平成24年12月22日 文化遺産シンポジウム「歴史の息吹を感じる―地域文化遺産の保護に向けて」報告会（大江町）米村・岡田・長田
- 平成25年3月2日 「平成24年度 研究調査報告会」報告会（本学）長坂・北野・米村・岡田・大山・大場・長田

4. 研究会の開催

(1) 内部研究会

本研究は専門分野が異なる研究者（美術史・立体作品修復・古典彫刻修復・東洋絵画修復・西洋絵画修復・保存科学・考古学・建築史など）が総合的に同一地域において同一の目的を目指した研究を進める方法をとっている。そのため、研究進捗について頻繁に検討する必要があると考え、毎月1回の内部研究会を実践することとした。

内部研究会では、実践している当文化財保存修復研究センターの各分野の研究者が、調査活動を基に各文化遺産に対する多面的な検討を行い、その意義や背景を確認し、調査で明らかになった情報をもとに、今後の活動方針の共有を行った。

平成24年度内部研究会開催日：

平成24年4月26日、5月21日、6月7日、7月4日、8月2日、10月2日、10月12日、11月10日、12月17日
平成25年1月15日、2月6日、3月4日

開催場所：

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター

参加者：

長坂一郎教授（センター長）、北野博司准教授、米村祥央准教授、岡田靖専任講師、大山龍顕常務嘱託研究員、大場詩野子常務嘱託研究員、長田城治ポスト・ドクター、鶴浦脩平研究補助員、永井泊研究補助員

(2) 外部研究会

本研究は地域の文化遺産保護を目的としているため、その推進のためには地域の地方自治体や外部の研究者らとの連携が不可欠である。そのため、主な研究対象地域としている大江町・西川町・高島町教育委員会の担当者や文化財保護委員らと、研究の深化や連携体制の強化を図ることを目的とした、外部研究会を随時開催した。

また、本研究テーマ1において取り組んでいる地域文化遺産の新たな価値の創出の活動には、美術史・保存修復を専門とする文化財保存修復研究センターの研究員の専門研究範囲を越えた見識を有する外部研究員の協力が必要であるため、研究対象としている地域の歴史・歴史地理学・郷土史・宗教学・民俗学などを専門とする外部の研究者を外部研究員として連携することで、研究の推進を図っている。本年度はそれらの外部研究員と本研究の情報共有を目的とした外部研究会を適時に実践し、共同研究体制により研究を進めた。その結果、本年度は7名の外部研究員の協力を得ることができ、研究密度の向上と多角的な視点による研究が可能となった。

来年度も外部研究員と密に連携を図り、研究を深めたい。

平成24年度報道紹介

日付	掲載新聞	タイトル
平成24年4月21日	週刊置賜タイムズ	石臼等多種多様に活用
平成24年4月22日	山形新聞	「高島石は生活に密着」
平成24年5月23日	山形新聞	高島石どう利用？
平成24年7月12日	山形新聞	棚を清掃、仏像は修復
平成24年11月2日	山形新聞	有力者埋葬の可能性
平成24年11月6日	山形新聞	10年間の取り組み紹介
平成24年11月6日	朝日新聞	文化財保存修復の成果
平成24年11月7日	河北新報	地域文化遺産の修復例など紹介
平成24年12月21日	読売新聞	シンポジウム 「歴史の息吹を感じる ― 地域文化遺産の保護に向けて ―」
平成24年2月4日	山形新聞	本県ゆかり 高橋源吉の世界
平成24年3月24日	山形新聞	文化庁長官 県内2団体に感謝状

石臼等多種多様に活用

東北芸術工科大学文化
高島石の会等 調査結果を地元説明会

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターと高島町教育委員会、高島石の会の高島石調査説明会が17日夜、同町安久津公民館で開かれ、昨年6月から二井宿街道沿いの安久津二と鳥居町で調査した内容が報告された。

高島石は、貴重な石材資源として住民の暮らしを支えてきた歴史があり、現在も町並みに多くの石が残っている。高島石採掘の歴史や技術、利用の実態を調査するとともに、



町並みの文化的価値や魅力を探ろうと、同大学学

生や地域住民も参加して「高島まちあるき」を四回実施したほか、石切場や石造物を現地に訪ねて計七回にわたり調査してきた。これらの成果は今日21日開催する「高島石の里まちあるきシンポジウム」で報告される

が、その前に地元住民に対し報告しようとして説明会を企画。約三十人が参加した。説明会では同大学歴史遺産学准教授の北野博司さんがあいさつ、博士研究員(P.D.)の長田城治さんが調査内容を報告調査した六十一戸で九百九十一件の高島石が確認され、家の基礎や石塀、境界などのほか、井戸や石鉢、石臼など多種多様に利用されていることなどが報告された。

シンポジウムは高島町総合交流プラザで午後一時から、「高島石の歴史を紡ぐー未来への活かし方を求めて」をテーマに開催される。参加費無料。

高島石 どう利用？

芸工大 研究員 地元有志と現地調査



高島石を調査する東北芸術工科大学文化財保存修復センターの研究者ら。高島町安久津

高島町で採れる凝灰岩「高島石」を研究する東北芸術工科大学文化財保存修復センターの研究者らが20

日、地元有志で組織する高島石の会のメンバーとともに、町内の住宅で使われている高島石の調査を行った。文部科学省支援事業の一環で2010年に高島石の研究を始めた同センターは、昨年6月から石の会の協力を得て町内で現地調査を展開。この日で8回目となった調査には、研究員と同大芸術学部生、石の会会員の計15人が参加し、安久津の鳥居町集落の計17軒を訪ねて石の使われ方や特徴

「高島石は生活に密着」

シンポ 住民に研究成果を発表



高島町で採れる凝灰岩「高島石」について考察する「高島石の里まちあるきシンポジウム」が21日、高島町総合交流プラザで開かれ、高島石を研究する東北芸術工科大学文化財保存修復センターの研究者らから多数あり、現在も住宅の外構や牛つなぎ、栽培中の果樹の重しなどに利用され

高島町で採れる凝灰岩「高島石」について考察する「高島石の里まちあるきシンポジウム」が21日、高島町総合交流プラザで開かれ、高島石を研究する東北芸術工科大学文化財保存修復センターの研究者らから多数あり、現在も住宅の外構や牛つなぎ、栽培中の果樹の重しなどに利用され

支援事業の一環として、2010年から高島石の研究を開始。昨年からは町内有志で組織する「高島石の会」の協力を得て、現地調査などをしており、地元住民に研究内容を発表

ているとし「高島石は持続可能な資源、貴重な文化遺産であり、町内独特の景観の形成にも役立っている」と述べた。このほか高島石の会会員の遠藤周次さんや、兵庫県の高山石の研究を行う同高砂市教育委員会の清水一文さんも講演した。

「反花」の裏 はっきり

1面から続く
 新海竹太郎の銘が書き置かれた仏像は、白鷹町十塩田の塩田行屋（しおなまき）に安置されている高さ30センチ、台座を含め全体の如來観音像。1977年作。塩田行屋は竹正の明海上人が建立し、如来形像など体が町の文化財に指定されている。地区が共同管理しており、白鷹町文化交流センターと東北芸術工科大学文化財保存修復センターが10月に行屋内の仏像の共同調査を実施。仏像である宗慶作の仏像が二十数体確認され、そのうち如來観音像の一部が竹太郎の銘が見つかった。行屋部分にある木製障子3枚、長存約20年の横田たえん柱の「反花（かえりばな）」の裏面に墨書があり、赤外線写真ではっきり「新海竹太郎」の文字を確認した。

「明治10年8月」9歳時の作と確認

9歳時の「明治10年8月」に制作されたことが記されており、今回、最も制作が早い作品が発見されたことになる。「仏像が作られた場所が白鷹なのか山形なのかは分からないが、反花の裏面などに手を印けたのではないかと白鷹町文化交流センターの宮本高朗委員（彫刻家として大成する竹太郎の造形感覚には、仏師修業の影響があることが近年の研究で指摘されている。今回の発見は遺の郷史だけでなく、日本近代彫刻史にも重要な意味を持つと見え、そうしたと語っている。山形美術協会の岡信孝委員長（おののけいじ）は、おののけいじは「新海竹太郎伝」には、1877年（8歳）までの記録がほとんど事かかれていない、その不明な大部分をほつきらせる非常に重要な発見ではないかと話している。

竹太郎は、13歳（かみ）で大江町で仏師修業をしたことが確認されているが、それ以前に誰かしていたかどうかははっきりしていない。天保裏には、竹太郎が

新海竹太郎（しんかい・たけたろう）近代彫刻家。1868（慶応4）年、現在の山形市十日町に仏師宗松（宗慶）の長男として生まれる。後藤貞行に師事し、浅井忠にデッサン、小倉豊次郎に影響を学ぶ。1900年に渡欧し、ドイツのアカデミックな彫刻技法を身に付けた。文庫は07年の第1回から

「あみ」は県内では山形市役所ロビーと、山形美術館に展示されており、その石ころ原型（国立近代美術館所蔵）は国指定重要文化財。

仏像に新海竹太郎の銘

白鷹で発見 彫刻の大家「原点」
 山形市出身で近代彫刻の大家・新海竹太郎（1868〜1927）年の銘が、宗慶（そうけい）が制作した白鷹町内にある仏像の台座部分の「反花（かえりばな）」から発見された。竹太郎はこれまで10代前半に仏師修業していたことが分かっているが、この仏像が作られたのは1877（明治10）年で、竹太郎はこの時、9歳。調査に当たった関係者は「彫刻家として大成する竹太郎の原点が明らかになった」と話している。



●反花の赤外線写真。新海竹太郎の墨書がはっきり確認できる（東北芸術工科大学文化財保存修復センター）提供
 ●台座の反花から新海竹太郎の銘が見つかった如來観音像。白鷹町文化交流センター

棚を清掃、仏像は修復

塩田行屋で芸工大関係者 白鷹 十王



湯殿山の行者が白鷹町十者によって行われた。文化王に建立した塩田行屋（し）財の劣化防止が目的で、行（おたぎようや）の清掃が8屋の本堂や土蔵にたまった動物のふんを取り除き、仏像を応急修復した。写真。14人が参加した。本堂部分では35体の仏像を棚から移し、棚にたまったネズミのふんなどを清掃。天井裏の動物のふんも取り除き、手の部分（折れるなど）がた仏像は接着剤で修理した。関係者は声をかけ合いながら慎重に作業を行った。同大文化財保存

修復研究センター講師の岡田靖さん（左）は「行屋は町や県の貴重な文化遺産だが、管理は近くの住民に任せられるのみで不十分。行屋の存在もほとんど周知されていないかった。今回の清掃が地域の宝を見つめ直すきっかけになれば」と話していた。塩田行屋は南陽市小滝出身の湯殿山修験者、明寿海上人が明治期に建立した。内部の仏像は町指定有形文化財で、ほとんどは山形市出身の近代彫刻の大家・新海竹太郎の父、新海宗慶が手掛けたとされる。14、15の両日は同所で特別公開が予定されている。時間は2日間とも午前10時〜午後4時。拝観料は200円。問い合わせは管理者代表の渋谷佐内さん0238（865）269626。



戸塚山古墳群 M175号墳の地形測量の結果などが説明された
米沢市浅川

米沢・戸塚山 有力者埋葬の可能性 M175号墳 石室、出土品で判明

米沢市教育委員会が同市浅川で発掘調査を進めていた戸塚山古墳群の現地説明会が1日、開かれた。調査の結果、M175号墳は7世紀後半から8世紀前半のもので、石室の大きさや出土品から有力者が埋葬されていた可能性があることが分かった。一方、M195号墳は古墳ではないと判明した。

M175号墳の調査は、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターが担当。同大歴史遺産学科の北野博司准教授らが8、9月、地形測量などを実施した。同

墳は円墳で直径約14メートル、高さ約4メートル、石室長さ7メートル、幅約2メートル、最大規模。また、馬具が出土していることから、馬具を保有する身分の人が埋葬されたと考えられるという。また出土品の形状から、古墳は7世紀後半から8世紀前半のもので、埋葬は複数回行われた可能性があることも分かった。

戸塚山古墳群は市内北西部の戸塚山にあり、9支群で約200基の古墳が確認されている。

山形市の東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターの10年間の取り組みを紹介する展示「地域文化遺産と保存修復」が、同大図書館で開かれている。研究員が展示解説する一般向け見学会は6日午後2時から開催。センター見学もできる。展示は7日まで。

山形で展示 芸工大文化財保存修復研究センター 10年間の取り組み紹介

同センターは2001年に設立。県内の寺社仏閣を中心に、仏像や絵馬といった美術品の修復、研究を行っている。現在は東日本大震災で被災した美術品も多く持ち込まれ、教員や学生が復元に取り組んでいる。

展示はポスター約40枚。鶴岡カトリック協会の黒い聖母マリア像や庭月観音（鮭川村）の観音像などの修復作業、遺跡発掘の様子、和紙や古民家の研究について、写真を多用して説明している。問い合わせは同センター1023（627）2204。



文化財保存修復研究センターの取り組みが紹介されている＝山形市・東北芸術工科大

執筆者業績一覧

1. 内部研究員

長坂一郎 Ichiro Nagasaka

現職：文化財保存修復研究センター長・教授（美術史・文化財保存修復学科兼務）

学歴：早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了 文学博士

職歴：1982年福井県立博物館学芸員、1994年東北芸術工科大学専任講師、1996年准教授、2009年より現職
専門：日本彫刻史

著書：『神仏習合像の研究』中央公論美術出版, 2005年

藤原 徹 Toru Fujiwara

現職：文化財保存修復研究センター研究員・教授（美術史・文化財保存修復学科兼務）

学歴：ツール美術学校保存修復科卒業（仏国認定立体作品保存修復師）

職歴：1997年武蔵造形研究所に勤務、2000年宮城県美術館へ勤務等を経て、2004年より現職

専門：立体作品保存修復

著書：Restouration'une Sculpture en platre de Joseph comte de Nogent, Ecole Regional des Beaux-Arts detours, 1996年、共著『佐藤忠良記念財団、修復報告書第2号』佐藤忠良記念財団, 1998年、共著『東京国立博物館文化財報告 I』東京国立博物館, 1999年

半田正博 Masahiro Handa

現職：文化財保存修復研究センター研究員・教授

学歴：長野県小県郡本原村立中学校卒業

職歴：1954年美術・額装(有)岡村多聞堂入社を経て、1967年半田九清堂入社、2001年より現職

専門：東洋絵画修復

著書：編集協力『在外日本美術の修復』中央公論社, 1995年、久米康生著 編集協力『和紙文化辞典』わがみ堂, 1995年、東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室 編執筆指導『図解日本画用語辞典』東京美術, 2007年

森 直義 Naoyoshi Mori

現職：文化財保存修復研究センター研究員・教授（美術史・文化財保存修復学科兼務）

学歴：ベルギー国立ラ・カンブル視覚芸術高等専門学校保存・修復課程

職歴：1994年森絵画保存修復工房設立、2009年より現職

専門：西洋絵画保存修復

著書：『修復からのメッセージ』ポーラ文化研究所, 2003年、「今、西洋絵画修復家として」『日本芸術の創跡』世界文芸社, 2010年、「西洋絵画の組成とその調査」『光を描く印象派展』青森県美術館, 2011年

北野博司 Hiroshi Kitano

現職：文化財保存修復研究センター研究員・准教授（歴史遺産学科兼務）

学歴：富山大学人文学部卒業

職歴：1984年石川県教育委員会、2000年より現職

専門：日本考古学（窯業史・古代地域社会論・近世城郭）

著書：共著『出羽の古墳時代』高志書院, 2004年、共著『文字と古代日本 第2巻』吉川弘文館, 2005年、共著『日本海域歴史大系 第2巻』清文堂, 2006年、「律令国家転換期の須恵器窯業」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第134集, 2007年

三浦功美子 Kumiko Miura

現職：文化財保存修復研究センター研究員・准教授（美術史・文化財保存修復学科兼務）

学歴：東京芸術大学大学院美術研究科保存科学課程修了

職歴：1991年半田九清堂、2003年山領絵画修復工房、2006年伝世舎設立、2010年より現職

専門：東洋絵画修復

米村祥央 Sachio Yonemura

現職：文化財保存修復研究センター研究員・准教授（美術史・文化財保存修復学科兼務）

学歴：東京芸術大学大学院美術研究科保存科学課程修了

職歴：2000年(財)元興寺文化財研究所入所、2004年より現職

専門：文化財保存科学、分析化学

岡田 靖 Yasushi Okada

現職：文化財保存修復研究センター研究員・専任講師

学歴：東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程文化財保存学保存修復彫刻修了 博士（文化財）

職歴：2004年東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学保存修復彫刻研究室非常勤講師、2007年(財)文化財保護・芸術研究助成財団在外研修員としてイタリア・フィレンツェの国立修復研究所(OPD)などで研修、2009年より現職

専門：彫刻文化財(仏像)保存修復

著書：Sculture lignee in Giappone e in Italia tra 1000 e 1500. Un confronto frate cniche di assemblaggio, OPD Restauro No.20, Opificio delle Pietre Dure e Laboratori di Restauro di Firenze,2009年、「庭月観音像の科学的調査と修復実践に関する研究」東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター紀要No.1, 2011年、共著『文化財保存学入門』丸善プラネット, 2012年

大山龍顕 Tatsuaki Oyama

現職：文化財保存修復研究センター常勤嘱託研究員

学歴：東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程文化財保存学専攻保存修復日本画修了 博士（文化財）

職歴：2007年宇都宮文星芸術大学美術学部日本画専攻助手、2009年東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターポスト・ドクター、2010年より現職

専門：日本画、古典絵画模写、東洋絵画修復

著書：共著『図解日本画用語辞典』東京芸術大学大学院文化財保存学日本画研究室編東京美術, 2007年、共著『日本絵画の謎を解く—東京芸術大学文化財保存学日本画博士の研究』東京芸術大学出版, 2007年、「地域の文化財に対する修復と保存処置」東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター紀要No.2, 2012年

大場詩野子 Shinoko Oba

現職：文化財保存修復研究センター常勤嘱託研究員

学歴：東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程文化財保存学専攻保存修復油画修了 博士（文化財）

職歴：2009年東京国立博物館学芸研究部保存修復課環境保存室研究補佐員、2011年より現職

専門：西洋絵画保存修復

著書：共著「敦煌莫高窟第285窟壁画の保存状態」保存科学48号, 2008年

長田城治 Joji Osada

現職：文化財保存修復研究センターポスト・ドクター

学歴：東海大学大学院総合理工学研究科総合理工学専攻修了 博士（工学）

専門：日本建築史

著書：共著「東北地方の民家における主室名称と平面の関係」日本建築学会計画系論文集, 第643号, 2009年、共著「『関口日記』にみる民家のライフヒストリーと部屋名称の関係」日本建築学会計画系論文集, 第655号, 2010年

2. 外部研究員（報告書掲載順）

那須恒吉 Tsunekichi Nasu

現職：西川町教育委員会生涯学習課・町史編纂室 郷土史調査員

学歴：山形大学教育学部卒業

専門：人文地理学

著書：共著『出羽三山・葉山』、共著『西村山の歴史と文化1～IV』、西村山地域史研究会, 1996年、共著『寒河江市史 下巻 近・現代編』、『西川町史資料（第19～26号）』

岩鼻通明 Michiaki Iwahana

現職：山形大学農学部食料生命環境学科 教授

学歴：京都大学大学院文学研究科修士課程修了 博士（文学）

専門：人文地理学

著書：『韓国伝統文化のたび』ナカニシヤ出版、2008年、『出羽三山信仰の圏構造』岩田書院, 2003年、『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』名著出版, 1992年

菊地和博 Kazuhiro Kikuchi

現職：東北文教大学短期大学部総合文化学科 教授

学歴：法政大学文学部哲学科卒業 文学博士（東北大学）

専門：民俗学、民俗芸能論

著書：『シン踊り 鎮魂供養の民俗』岩田書院, 2012年、『やまがた民俗文化伝承誌』東北出版企画, 2009年、『庶民信仰と伝承芸能』岩田書院, 2002年、『手漉き和紙の里やまがた』東北出版企画, 2008年、共著『最上川と羽州浜街道』吉川弘文館, 2001年

宮本晶朗 Akira Miyamoto

現職：白鷹町文化交流センター 学芸員

学歴：東北芸術工科大学大学院芸術工学研究科修士課程芸術文化専攻修了 修士

専門：日本彫刻史・彫刻文化財保存修復

著書：共著「新海宗慶(宗松)および少年期の新海竹太郎の造形的特徴における新知見—神仏分離に伴う古仏修理から得られた造形理解に関する考察」『東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター紀要No.2』2013年

小林俊介 Shunsuke Kobayashi

現職：山形大学地域教育文化学科 教授

学歴：筑波大学大学院博士課程芸術学研究科修了 博士（芸術学）

専門：近代日本美術史

著書：『難波田龍起—「抽象」の生成—』美術出版社, 1998年、共著『クラシック モダン—1930年代日本の芸術』せりか書房, 2004年、共編『美術批評家著作選集 第11巻』ゆまに書房, 2011年

三上喜孝 Yoshitaka Mikami

現職：山形大学人文学部人間文化学科 准教授

学歴：東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学 博士（文学）

専門：日本古代史

著書：単著『日本古代の貨幣と社会』吉川弘文館, 2005年、単著『日本古代の文字と地方社会』吉川弘文館, 2013年、単著「中近世の仏堂墨書と地域社会:天童市若松寺観音堂墨書の調査をふまえて」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』6, 2009年

渡部 桂 Katsura Watanabe

現職：東北芸術工科大学デザイン工学部 講師

学歴：東北芸術工科大学大学院芸術工学研究科修士課程デザイン工学専攻修了 修士

専門：ランドスケープデザイン

著書：共著『未来の住宅 カーボンニュートラルハウスの教科書』バジリコ, 2009年

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成22～26年度）
「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」

平成24年度

文化財保存修復研究センター研究成果報告書

Bulletin of Institute for Conservation of Cultural Property

2013. 8

平成25年 8月31日発行

東北芸術工科大学
文化財保存修復研究センター

〒990-9530 山形県山形市上桜田三丁目4番5号

TEL 023-625-2204

FAX 023-627-2303

E-mail iccp@aga.tuad.ac.jp

ホームページ <http://www.iccp.jp>

ISSN 1881-5553

©Institute for Conservation of Cultural Property (ICCP), Tohoku University of Art&Design, 2011



TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN

平成24年度 文化財保存修復研究センター研究成果報告書

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成22～26年度）
「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力の向上システムの研究」

ISSN 1881-5553